塔への門が立つてゐる。私は自動車から下りて案内者と一所に門の所へ近づいた。入口には粗末な木の卓を置いて、その上に白檀の木片を澤山積んで賣つてゐる。香にしてくゆらす爲めの線香の代りのやうなものであるらしい。佛臭い陰氣な氣持がどことなく漂つてくるのが感ぜられる。門番の土人が、奥の方へ迎へに行つた案内に立つ役僧の出てくるのを待ちながら、私は門の扉にもたれて内を眺めてゐた。

門の中もゆるい勾配のだら〳〵阪になつて上の方にあるらしい建物は、木立にかくれて見えない。中腹に天をつく巨人のやうに枝を四方に張つたすばらしく大きなマラーの樹が一本立つてゐる。ねむに似た葉が青々と茂つて今が盛りの花時と見えて、毒々しい褪紅色の躑躅に似た花がべつとりとどの枝にも一面に咲き滿ちてゐる。釋尊と緣の深い樹だといふことであるが、じつと眺めてゐると、ルバイヤットの豪華版の挿畫でも見てゐるやうな、華やかなうちに、うら淋しい一脈の無常觀がにじみ出てくるのが感ぜられる。すべてインドに咲く佛に緣のある花は、いかに美くしい色に咲いてゐても、どとかに見てゐると寂滅爲樂の無常觀の匂ひが漂つてゐるやうに感ぜられるのは不思議である。

突然激しい羽ばたきが靜かなあたりの空氣をかき亂して、大きな鳥が一羽マラーの樹のいたゞきに止まつた。紅い躑躅に似た花が二つ三つポトリと落ちた。

「アレが鳥咀の禿鷹ですよ。ご覽なさい、方々の樹の上に澤山とまつてゐるでせう」

案内者にさう云はれて私は寺内の木を森を見廻はした。氣がつけば誠に驚くべき鳥の數である。梢のいたゞきに二羽三羽、中には十二三羽づゝも固まり合つて止まつてゐるが、何といふ醜惡な氣味のわるい姿なのであらう。黑色の羽根はいらだゝしげに亂れて、禿げて骸骨に似たむき出しの頭部に眼ばかりは鋭く光つてゐる。正に地獄の獄吏といふにふさはしい凄さが、禿鷹の大きなからだ全體からにじみ出してゐる。

遠くの空からまた六七羽群れを爲してとんで來たかと思ふと、近くの大木の梢に揃つて止まつた。一たん止まるとじつと動かずに羽を休めて、たゞ底氣味わるく目ばかり鋭く働らかせてゐる。これが人間を毎日食つてゐる鳥なのかと思ふとその鋭く先きの曲つた嘴が、たまらなく惡感を催してくる。私は暫く鳥を眺めて立つくした。

「どうぞこちらへ」

と僧形の若い男が一人門の中からさしまねいた。こんな陰氣な所にゐるものに似合はず、割合に愛想がいゝ。

僧について石段を登つて行く。

絕對に寫眞をとつてはならぬこと、煙草をすつてはならぬことなどを道々僧はくどく念を押

した。事火教の本坊に入りこんだのであるから致し方はないとはいふものゝ、煙草のすへぬのは大きな苦痛だつた。

石段を登りつくすと上は廣い平地になつて庭園の向ふは深い森が立こめてゐる。庭園には何といふ草か知らぬが、紅や黄の花が美くしく咲き亂れて、野生の孔雀が悠然とそこらを歩るき廻つてゐる。

庭園のはづれには柵があつて向ふには行けぬやうになつてゐた。案内に立つた僧は、その柵に倚りながらあれが沈默の塔ですと指した。深い森のかなたに白い大きな圓形の城に似たものが立つてゐる。兩國の國技館を白煉瓦で築き上げたやうな感じである。城壁の上に禿鷹が七八羽、造りものゝやうに靜かにとまつてゐる。

そばまで行つて内も見られるものとばかり思つてゐた私は僧の説明をきいて失望した。パーシー屬にとつては神聖なこの祭場は異教徒はもとよりのこと、パーシーであつても滅多にはそばへ近よらせぬのださうである。

「英國のプリンス・オブ・ウエールスが嘗て來觀された時にも、こゝより向ふへは御案内申さなかつたのです」

と若い僧は宗教の威嚴は、いかな權力にも屈せないのだといふやうな强い口調で昂然と云つ

た。さうして近くにある塔が普通の男女を鳥咀させる塔、遙かに木の間に隱見する小型のが、自殺したり人に殺されたりした變死者の塔だと説明して聞かせた。成程木の間を通して奥深くいくつかの塔が散在してゐるのが見える。

いくら見てゐても大して面白くもないので私は案内の僧について引返した。

花園を通りぬけると墓地になつてゐる。中年の男が一人その邊の石に腰を下ろして小型の教典を手にして大きな聲で何か經文を唱してゐた。黄色い蝶が一つ、その男の廻りを狂つたやうに飛び廻つてゐるのが、何んとなく神祕めいた妙な氣持にさせた。

寺の中へ入ると、そこに石膏で造つた沈默の塔の模型が土間に置いてあつた。傍へ近よることも禁ぜられてゐた塔もこの模型で見ると組織は一目瞭然とわかつた。外見だけでは國技館のやうな圓形の塔も、それは外壁だけのことで、塔の中はすり鉢のやうな屋根のない緩い勾配をした構造で、何のことはない球場の觀覽席のやうにすきまもなく幾筋もの輪をなしたひだが連なつてゐる。この一つのひだの上に、死人を裸にして置くのだといふ。いよ〳〵死人をこゝに運び入れると、禿鷹はちやんと知つてゐて、幾十幾百といふ鳥が外壁の上に並んで待ちかまへてゐる。裸にされた死人をそこに横たへて運搬人が塔の外へ出ると一齊に禿鷹が群がつてこれを嘴む、大がい十五分位で骨ばかりに奇麗に食はれてしまふ。骨は傍の溝から下に落ちるやう

になつてゐるのださうである。私は僧の説明をきゝながら模型を見てゐると、何だか目の前に死骸を嘴む禿鷹の様子が彷彿としていやな氣持がして來た。

「この塔の中のひだのやうなものは三段に分れてゐるでせう。上の一番大きなひだの所は男の死體を置くのです。次は女、一番小さいひだは小供を置くのです」

と僧は馴れても居るのであらう、自分達の信仰なのであるから無慘だなどゝは夢にも考へないのであらう、平氣な顏をして説明してゐるが、私にはもう聞いてゐられないやうな氣がしてきた。いたいけな小供の裸身が、いかに死體であるとは云つても、あの恐ろしい慘忍そのものやうな恰好をした貪欲な禿鷹の嘴に、さいなまれて餌食になる様子などを、慄然たる恐怖なくして想像しうるものがあるだらうか。

私はいやになつて外へ出た。

荒い羽音がして大きな禿鷹が一羽、すぐ近くの屋根に止つた。人を恐れもせぬ貪欲なこの鳥は、骸骨に似た頭を森にさへ切られた薄日に氣味わるく光らせながら、鋭い目をして私を見下ろしてゐた。石でも叩きつけてやりたいやうな衝動を感じながら、私は案内の僧について再び元の道を門の方へ引き返し出した。迷信から來る人間の行爲の果てしもない奇怪さに、憤りと憐れみとの織り交つた云ひやうもない感情が、心の底にかすのやうにこびりついてとれないも

どかしさがあつた。

だら〳〵阪を下りて門に出やうとする所に、長い回廊のやうなものがあつて、麓までつゞいてゐるのが見えた。日本の寺院にある渡り廊下を彷彿させる造り方である。

「この廊下は死人を運びこむ所です」

と案内の僧が教へてくれた。

私達から見れば無慘きはまる鳥葬の慣習も、パーシー屬から見たら神聖な儀式であつて、死ぬものにとつても、殘されたものにとつても至上至高の滿足であるのかも知れない。恐らくは奇麗に一物も殘さず鳥の餌食となるのが、極樂淨土への再生の保證にでもなることであらう。しかし、パーシー屬が死者を悲しむ情は他の民族にくらべて確かに薄いやうに見える。支那あたりは葬式の華やかさは、婚禮と好一對をなしてゐる。日本でも逝けるものへの最後の葬ひは出來るだけ立派にしてと考へるのが人情である。しかるにパーシー屬は婚禮はかなりに華やかなものだと云ふが、葬式は出會つても極めてみすぼらしいものばかりである。擔荷に似た簡單なものに佛をのせて白布を覆つたゞけ、くさ〴〵の花でも上にのせてあるのは寧ろ稀れである。その棺を四人のものがかついで、附添ふ親類や緣者も精々六七人か十人位にとゞまつてゐ

る。誰れもかれも眞白な喪服をまとつて、眞白な帽をかぶる。さうしてどういふわけからか知らぬが、二人づゝ白い布で手を結び合はせて歩るいてゆく。こうして極めてあつさりした行列が大して悲しみの何の表情もなしに街を通つて、マラバー、ヒルの不淨門の渡り廊下にまで送りつけられる。あとは四人の棺をかつぐものが、長い阪になつた廊下を登つて、沈默の塔の禿鷹の群れとぶ所まで持つて行くだけである。どうもこれでは私がパーシー屬のものは死者を悲しむ念が割合に稀薄なのではないかと疑ふのも無理だとは云へないであらう。

門まで送つてくれた案内の僧に、心ばかりの献金をして私は外へ出た。森の中で日は昏く、何となく陰氣ではあつたが、それでも私はいやな所から逃れ出たやうな氣がしてホツとした。

私はこれから二三時間の郊外のドライブを樂しんで水源地になつてゐる山の奥まで行く豫定である。あくまでも南國の樹々の茂つた深い山にたゝえられた大きな湖水には、今でも鰐がすんでゐるさうである。沈默の塔の陰慘な印象から逃れて、私は早く愉快なドライブが樂しみたかつた。

車は奔り出した。塔のつゞきの丘の上は氣持のいゝ山上の公園で海が一目に見下ろせた。南國のあくまでも明澄な空氣は、遠くの干潟に遊んでゐる豆のやうに小さな小供達まで、はつきりと輪劃を描き出して見せてゐた。かなりに廣い公園には白く塗つた氣持のいゝ腰かけが所々

に置かれて、手入れの行屆いた花園には、赤や黄の美くしい花が目もさめるやうなあざやかな色に咲きそろつてゐた。

「氣持のいゝ奇麗な公園だな」と私は自動車の運轉手に話しかけた。

「さうです、今は良い公園です。しかしこゝは水道の貯水池で、昔は水の一ぱい張つた大きな池だつたのですがね。何しろ隣りが沈默の塔で、時々人を食つたばかりの禿鷹が上を飛び廻るので、よく貯水池の中に人間の指などが落ちてゐることがあつたのです。吾々はその水をのむのですからやり切れません。そこで大きな池をすつかり土で覆つて公園にしてしまつたんです。今でもあの公園の下は水道の貯水池になつてゐるのですよ」

と英國人の運轉手は、汚たないものでもほき出すやうな顔をして苦笑ひをした。

ナチス清黨事件直後の伯林

I

ヒットラーが莫逆の友であつたレームを殺し、シュライヘルを血祭りにあげ、突擊隊の陣營を粉碎してナチスの清黨を斷行した。青天の霹靂のやうな事件の第一報を、私はウキーンから、チエツコスロバキアの首都プラーグへと向ふ汽車の中で受取つた。事件の起つた翌日のことである。

第一報は簡單であつてその全貌は無論わからなかつた。ナチス突擊隊の精鋭である將校が八人も射殺され、ドイツには暴動が起らうとしておるといふ程度の無氣味なニュース以外に詳しいことはわからなかつた。バルカンの旅をして廻る內に歐洲の政局不安はいたる所で、目に見えぬ電波のやうに、强く私達の神經を刺しつゞけて來た。ユーゴースラビアで、オーストリアで、ハンガリーで私はお互に爆彈を抱いて火遊びをして居るやうな、隣接國同士の不和を見てきた。怖ろしい近い過去の血の匂ひも嗅いだ、無氣味な近く起らんとする血の豫言のデモも可成り澤山にきかされてきた。

音樂と藝術の都であるウキーンも、リンデンの街路樹の並木にかくされたる物情の騷然さが感得される氣がした。郊外をドライブして藤の花や薔薇の花が、どこの垣根にも花ざかりの美

くしい溫泉町に、ベートーヴェンの靜かに作曲にふけつた家や、モツアルトがアベ・マリアを作つた家などを見て、いゝ氣持になつて牧歌的の夢を見るやうな氣分にふけつてゐても、一旦ウキーンに歸つてくれば、目貫の大通りの廣場に立ついかめしい護國のシンボル。アイゼル・アンの巨像がまたゝくまにそんな氣分を叩き壞してしまふ。詩も藝術もあつたものか、現實のオースタリアに殘されたものは國土の大部分を奪はれて、僅かに殘つた苦惱の都としてのウキーンの淋しい姿があるばかりなのだ。二月の暴動の中心地であつて、盛んに政府軍と砲火をまぢへた市外のカールマルクス・ホツフを訪ねて見ると、社會民主黨華やかなりし時、當然戰鬪を豫期して造られたに違ひない嚴重な城のやうなその建物には、まだ生々しい砲彈の跡が外壁のいたる所に殘されてゐた。その歸り途に私は、今こそ共產系は一掃されて、基督敎社會主義派の全盛のやうには見えてゐるけれども、この獨裁には無理がある、靜かに見える表面も、一尺の底には激しい暗流が流れてゐる、獨、伊兩國からの、ナチスとフアツショの力は目に見えぬ大きな力でオースタリアに影響しだしてきてゐる、さう遠くないうちに今度はナチスの息のかゝつた暴動がきつと起る。ドルフスもいつやられるかわからない。といふ甚だ物騷な豫言をこゝの人からひそかに聞かされた。（二ケ月の後、本當にドルフスは暗殺されてしまつた。）

バルカンは昔も今も、少しもかはらぬ歐洲不安の癌である。本當に爆彈を抱いて火遊びをし

ておるやうな隣接國同士の不和。もしも、バルカンの小さい國々の背後にある歐洲の大きな國のバランスが破れるか、歐洲大戰の經驗で骨の髓までしみこんでゐる歐洲諸國の戰爭恐怖症さへなかつたら、こゝではもう迚の昔に第二の世界大戰の口火は切られてゐるに違ひない。さういふ感じをしみ〴〵と印象づけられて、バルカンを去つてドイツに入らうとする間際に、今度はドイツの動亂を聞いたのである。これはと思はざるを得なかつた。私達は二日の後には伯林へ入る豫定になつてゐたからである。

もう一つ私自身には過去に於て、ドイツに入つた時の忘れられない同じやうな思ひ出があつた。

一九二〇年春、私はカツプ革命のすぐあとでケルンから伯林に入つたことがあつた。カツプ革命といふのは當時の社會黨聯立內閣に反抗して立つた武斷派の革命で、カツプ、リユートウキツヒの二將軍が、突風のやうに伯林から十三哩ばかりはなれたドーベリツツからバルチツク軍八千の兵を率ゐて伯林を襲ひ、何等の反抗らしい反抗もうけずに政府の諸官廳を占領し、エーベルト大統領は身をもつてドレスデンに逃れてしまつた事件である。しかしこの革命は何の苦もなく伯林は武力によつて奪つたものゝ、勞働者の總同盟罷業といふ眞綿で首をしめるやうな反抗に會つてどうすることも出來ず、たつた五日間の天下で兩將軍は風雨のひどい夜に、ひ

そかに伯林を去つて、明智の三日天下に似たやうな結末を見てしまつたのであつた。私が白耳義を通つて、ケルンから伯林への夜汽車にのつた時には、もう革命はすつかりすんで、ドイツはもとの平靜に歸つてゐる筈の時であつた。私はもとより何の不安も持たずに、ぐつすりと夜汽車の寢臺で熟睡してしまつてゐた。所が夜があけて、もうすぐ伯林へ入るなと思ひながら寢臺から起上つてフト外を見やうとすると、窓ガラスが大きくひゞが入つて割れてゐた。ひゞの中心には疑ひもなく小銃の彈が通過した指の先き程の穴がポツンとあいてゐた。夜中に汽車に向つてうつた彈が、ねてゐて何も知らなかつた私の頭のそばを通りぬけたに相違ないのである。一尺か二尺の運命が私を助けたのであつた。もしも運がわるくて寢てゐる間にこの彈に當つて死んでゞもゐたらどんなもんだと考へたら、私は冷めたいものが身體中を通りぬけて行くやうな氣持のしたのを覺えてゐる。伯林の街へ入つてからは反つて何のこともなく、カツプ軍が打つたのだといふ小銃彈のあとが、所々に見られる建物の窓なども、そのまゝになつてゐたが、道行く人も誰一人興味をもつて立止まつてゐるものすらなかつた。

この時の私の經驗は、ウヰーンからプラーグまでの汽車の中で、伯林擾亂の第一報を手にした時に、すぐに、まざ〳〵と記憶から甦つてきた。何の因縁か知らぬけれども、ドイツへ入らうとすると、また騒動に出會ふなどは餘り悦れしいことでもなかつた。以前は革命がすでにす

んだことを承知して入つたのであるが、今度はまだ起つたばかりらしい時に、二日の後にその中へ入つてゆかなければならないのである。

伯林の有樣がまるで見當もつかぬで、どうしやうもなかつたが、プラーグまで行けば一切が判明するであらう、それまではとにかく行ける所まで押して行かうと考へて、落ちつかぬ心持で汽車に搖られて行つた。

一

翌日プラーグに着いて見ると、どの新聞もかなりくわしく事件の内容を報導してゐた。殊に英字新聞などはセンセーショナルな大活字を使用して、殆んど第一面の全部を費してゐるものもあつた。清黨の犧牲になつた人達の寫眞が澤山並べてのせてあつた。私はこゝで事件の外面的に見た全貌とその性質をはつきり呑込むことが出來た。暴動では無くして、ナチス陣營内のリンチともいふべき大掛りな直接行動の現はれであることもわかつた。英國人がブルータルと批判するほど慘虐な悲痛きはまる事件ではあるけれども、伯林で血を流し合つたり、國際的問題を引起して風雲を捲く憂ひのあるものではないことがわかつて、旅行者としての私はまづホツとした。

國際聯盟第一主義のチェッコ、經濟上から見れば、同じやうな商品を以て市場を日本と爭ふ地位に立つ、チェッコ。そのチェッコが日本に對して好い感じをもつてゐないことは行きづりの旅行者としての私達にも、爭へない目に見えぬ空氣として感じられてきた。プラーグの宿などでも、どこか親しめない冷めたいものが、そこら中にあつた。しかしたつた一つ良いことはドイツの問題を遠慮なしに根堀り葉堀り新聞が書きつくしてゐることであつた。これから伯林に入つて行かうとする私達にとつては、こゝで新聞が何もかも詳しく書いてゐてくれることは何よりも有難かつた。

恐らく言論の壓迫の徹底ぶりから見れば、チェッコスロバキアは歐洲でも五本の指に數へられる國の一つに相違ない。ナチスに大反對のこの國はナチス系の政黨は用捨なく解散させてしまつたし、ナチス臭の新聞は廢刊を命じて根滅してしまつた程、キビ〳〵した暴壓振りを發揮したのである。現政府に都合のわるいものは、言論機關だらうと何だらうと靴で蟲けらを踏みつぶす程の情け用捨もなしに、どし〳〵息の根を止めて行くのである。最近には政府が新聞社に禁止命令を出して、議會での委員會の記事を一切掲載すること罷りならぬと差止めたので、これには流石の弱い新聞社も默つてゐられぬと見えて、連名で政府に抗議を申込んだといふ位の、徹底した無茶な暴壓の國である。だから若しも今度のナチスの清黨事件が、自國に都合の

わるい事件でゝもあつたのなら、恐らく政府は新聞社からもその記事を完全に封じてしまつたに相違ない。さうしてその記事を書いてある外國紙は一切發賣を禁止させてしまふ位のことは平氣でやつたに違ひないのである。

幸なことにはナチスはチェッコの敵である。現在のドイツとオースタリア、ハンガリーとはチェッコにとつて一番憎むべきものである。ウキーンの二月暴動の時などには、實はプラーグから武器が送られてゐたのだといふ噂もあるし、革命破れてウキーンから亡命して來た共產系の勞働者は、澤山プラーグに安住してゐるのだとも云はれてゐる。ソヂエート・ロシアを承認したチェッコとしては當然のことだと云へばそれまでゝあるが、對オーストリアの惡感情がこの行動の背後に有力に動いてゐることは爭はれない。現にプラーグの街のどこへ行つて見てもドイツ語の看板などは一枚も見られない。昔はドイツ語の看板ばかりだつた。大戰前オーストリアの治下であつた時にはチェッコ語の看板を出すことは固く禁ぜられてゐたのであるが、獨立國となつてからは、その反動でゝもあらうか、今度はドイツ語の看板を一掃して、もし誤つてドイツ語でも書くものがあれば、皆して引はづして川へぶちこんでしまふといふ憎惡ぶりである。

かういふ調子のチェッコなのであるからドイツにヒツトラーのリアクションが起つたことな

どは、新聞に禁止するどころか、大いに書かせたかつたことなのであらう。どの新聞もいゝ氣持になつて大々的に報導してゐた。

おかげで私達は伯林に入る前に事件の大體はすでに十分に知ることが出來た。だが、プラーグに滯在中に知り得たことだけでも、いはゆるナチス清黨事件が容易ならぬ大きな意味をもつものであることは十分に了解された。

最初はヒツトラーを仆してナチスの陣營を一變させやうとする第二革命の勃發と、これに對するヒツトラーの彈壓だと傳へられてゐたので、私はその一味が、レームやシュライヘルのやうな大立物をつぎ〳〵に幾人か銃殺されたり捕縛されたりした報導を見た時、たとへ首領株は殺されたにした所で、あれ程の大きな勢力をもつてゐる突擊隊が默つてノメ〳〵と抑へつけられておるものでもあるまいし、結局は武裝警察隊と突擊隊との武器をとつての衝突、暴動の續出といふやうな血なまぐさい事件が、伯林をはじめ各地で起るのに違ひない。さうなつては伯林へ入るのは容易なことではないかも知れぬと考へてゐた。

しかし、あとから入つてくる報導を見ると、その點は甚だあつけなかつた。疾風のやうに、血なまぐさい無情冷酷とも見える巨頭連の處刑がばた〳〵と執行されると、それだけであとは氣味のわるい程靜かなものらしかつた。どの新聞の報導も清黨事件のその後の動きなどは碌に

書く種もないと見えて、餘りふれもせず、六月三十日から七月一日にかけての血の彈壓の內容を詳細に書き立てるに忙しかつた。

宣傳相ゲベルス對副總理パーペンの面白からぬ對立や、突擊隊の正規軍とも義勇軍ともつかぬ蛇の生殺しのやうな地位に對する滿々たる不平を持つ隊長レームと、前首相シュライヘルとの提携。急進的な國家社會主義と、ドイツチエン、ツームの傳統に生きんとする保守主義。それに帝政主義が織まぢつて、三つ巴になつてぐる〳〵廻つてゐる思想抗爭。等々、いろ〳〵複雜な裏面の原因が、結局、レームをして、ヒツトラーは突擊隊の敵である。劍をとつて同士よ立て、第二革命によつて柔弱化するドイツを更生させよといふ叫びをあげさせることになり、シュライヘル等と結んで、革命の實行運動の畫策をはじめたので、この空氣を知つたヒツトラーが機先を制して、反亂陰謀の名によつて彼等を捉へて、用捨なく思ひ切つて銃殺してしまつたといふわけであるらしい。莫逆の友も、舊き同士もあつたものではない。一見すれば、そこには血も涙もないやうな、冷酷無慘なる舊き盟友同士の殺し合ひが行はれたわけである。

當時ヒツトラーは田舍で青年團の檢閲か何かをやつてゐたが、もと〳〵豫定の行動なのであらう。飛行機を乘廻して活躍し、反逆者の處刑は言葉通り疾風迅雷の速かさで行はれてしまつた。

血で血を洗ふやうな事件であるだけに相當深刻な悲劇が展開されてゐる。シュライヘルは伯林郊外の別莊に行つておる所を警察隊の一隊に襲はれた。いや應なしに逮捕しやうとすると、彼は頑强に抵抗し出した。警察隊はピストルを出してこれに應じた。この有樣を見た夫人は夫の身を護らうと前に立つた所を、ピストルが鳴つて、夫人は血に染んで仆れた。續いて二三發のピストルの音がしてシュライヘルはばつたりと夫人の上に折重なつて仆れた。これが前總理大臣、フオン・シュライヘルのあつけない最後であつた。

突擊隊長のレームの家へはヒットラー自身で出かけて行つた。早朝寢込みを襲はれたレームは無抵抗でこの無氣味な招かざる客の前に立つた。流石に罪人としての恥を與へるのは、武士の情ではないと思つたのであらう、わざ〳〵その家へ出向いて行つたヒットラーはピストルをつきつけて自殺しろと言つた。この邊は何となく日本の武士道と似たい〻所があるのが感ぜられる。しかしレームは自裁するだけの決心がつかなかつたらしい。いつまでも死の勸告に應ぜぬレームを見ると、もう用捨はなかつた。ピストルが鳴つた。さうして自ら殺し得なかつたレームは、反逆者の汚名の下に銃殺された血だらけの姿を床の上に横たへた。しかし考へて見れば、ヒットラーとレームの二人はナチス獨逸を今日あらしめた切つても切れぬ血をすゝり合つつた本當の盟友であつたのである。祖國ドイツを救はんがために手を握つて立つた二人の、志

丈は壯であつても力のなかつた境地を一轉して力の背景をもたしめたものはレームであつた。最初は僅かに數人にすぎなかつた手兵を土臺にして、今日では百五十萬人を算する突擊隊を育て上げたのはレーム彼自身であつた。ヒットラーの今日は實にレームが造りあげた突擊隊を背景にしたればこそ、成しとげられたのである。ヒットラーにとつてはレームは切つても切れぬ盟友でもあれば恩人でもあつた筈である。だからこそ功成つた後に、レームの專横が流石に目に餘るものがあつてヒンデンブルグ大統領から手痛い排擊をうけた時ですら、ヒットラーは盟友の爲めにこれを庇護して、かばひ通した。これ程に深い因緣でつながれてゐるレームを、よくよくのことがあつての決心なればこそ、自ら逮捕にも向ひ、自殺をすゝめたのであらう。それが容れられずして遂に射殺せねばならなかつた。多年の盟友がわが手で殺されて、目前に屍を横たへたのを眺めた時のヒットラーの心持はどんなに悲痛なものであつたらうか。私は悲壯な男性の涙をしみ〴〵と思ふ。「ブルータス、汝も亦」と血の叫びをあげて仆れる沙翁のシーザー劇のクライマックスは、こゝに再び男性の悲劇として實現されたのである。後年、人あつてこの歷史を描くものあらば、深刻な史劇は必ずや人の心をうつものがあるであらう。

短いプラーグの滯在中に私は知り得る限りの清黨事件の內容は知ることが出來た。ナチスの陣營內に於てこそ人の意表をつく驚天動地の大きな事件には相違ないが、その後事件は惡化は

せず、どうやらヒツトラーの決斷は、押して押し通して行くらしいのを見て私はまづホツとした。しかしこれから入つてゆくのは伯林である。ドイツの國民にとつては平氣ではゐられない不安な事件であるには相違ない。この事件がどんな影響を人心に與へ、どんな新らしい動きの芽を多くの人の心に培つてゐるかわからない。それ次第では靜まり返つたやうな水の面にいついかなる波紋が擴がつてくるのか見當はつかない。さう思ふと私は矢張り氣になつてならなかつた。

プラーグについてから三日目の午後私達は伯林行きの汽車に乘つてゐた。

廣々と見渡すかぎり麥の穗の風にそよぐ野。綠の葉かげの涼しげな森。百姓家の垣には向日葵が、のんびりと日を浴びて大きな花を開き、町家のヴェランダにはフクシヤの花が血のやうに美くしく咲く。汽車の奔るにしたがつて展開されてくる車窓の風光は、平和なおだやかな一幅の繪である。人間の世界は常に相爭つてゐるのに、自然は悠久に平和な歩みをつゞけてゐる。麥畑の上をとぶ雲雀の何と憂ひ無げであることよ。

ドイツの國境で汽車はとまつて、乘客は皆一應下ろされた。順に列をつくつて停車場の構内の一室によびこまれて、所持金を全部申告させられた。バルカンの旅で所持金調べはもう馴れてゐるので一向氣にもならなかつた。氣になるのはドイツ人達の態度であり顏色であつた。私

は彼等のものごしから清黨事件のドイツ人に與へる心的動搖位は匂ふかとかなり注意を拂つて見てゐたが、几帳面なドイツらしいてきぱきした態度で誰れもかれも平然と仕事をしてゐた。

汽車はまた奔り出した。車窓から見た風光は相變らず平和そのものであつた。エルベ川に添つて、きちんと箱庭のやうにとゝのつた森を山を眺めてゐると、川には遊覽の客をのせた輕快な汽船が碧い水をわけて長閑に浮んでゐるし、川沿ひの森の道を學生らしい一隊が、元氣にリユツクサツクを背負つて、ハイキングをして居るのも見える。レーム仟れ、シユライヘル射たれたのはどこの國のことかといふやうな感がする。

夜八時、アルハンターの驛についた。ウンター、デン、リンデンの大通りにあるホテル、ブリストルまで自動車を奔らせながら眺める町は、氣のせいかいやにひつそりとしてゐたが、特に目につく何ものもなかつた。

Ⅲ

突擊隊の首領連中が銃殺されてから五日目の朝であつた。ホテルの部屋から窓越しに外を眺めると、大通りのリンデンの並木が、昔の通りに靜かな涼しげな朝の日影を鋪道に落して、會社勤めらしい男が女が、傍目もふらずに歩るいてゆく。バスにも一ぱい人が乘つてゐる。いつ

もの通りの伯林の夜が明けて、伯林の朝が來たといふ感じしかない。

食事をとらうとして下におりてゆくと、廣間には外國人らしい一團や、ドイツ人の商人らしい男などが、二三人づゝ椅子を引よせて話しこんでゐた。皆、眞面目な顏をして笑ひ聲を立てるものもなく、いやにヒソ〳〵と何か話し合つてゐるのが、さすがに不祥事のあとらしい冷めたい空氣を感じさせた。氣のせいかボーイ達の顏も浮き立たず、用事以外には口をきゝたくないといふやうな樣子が見える。目には見えぬが一抹の不安氣分が誰れの心の底にもこびりついてゐるのは爭はれないらしい。

私はホテルの雜誌賣場に行つて新聞を買はふとした。外國の新聞は一枚もない。ドイツの新聞にはおざなりの政府發表の記事以外に何も新らしいことも書いてなければ、裏面の動きも匂はしてはない。プラーグで讀んだやうな詳しい記事を網羅した外國紙がほしくてならなくなつたが、どうしたことか一枚も賣つてゐない。恐らくは勝手に事件をうがつて書いておる外國紙は賣らせないやうにしておるのであらう。これでは伯林にゐては事件は政府發表以外には何もわかりつこはない。政府が國民に不安を抱かせるやうな發表をする筈は無し、伯林が丸で平穩で、たゞ何となしに落付かぬ不安空氣が感ぜられるのは、目かくしされたる平穩と不安とであることをはつきりと了解することが出來た。

私は街へ出た。街は氣のせいか昔より汚たなくなつてゐた。女の服裝は質素になつた。たゞ十餘年の昔には、ウンター、デン、リンデンの大通りですら、コンニチワなどゝ言葉をかけるバビロンの娘等がゐたものであるが、今ではそんな女達は小氣味よく影さへ見えなくなつてゐた。寄席に入つて見ると、以前は裸體を賣物にしたやうな、パリー以上の頽廢的な舞臺ばかり見せてゐた所が、男性以上に筋肉の隆々と發達した若い女の、體操のやうな輕業を見せる位が精々の所になつてゐた。徹底したナチスの色と匂ひが、どこにも充ち滿ちてゐた。

夕方のウンター、デン、リンデンを歩るいてゐると銃を肩にして氣の利いた黑服のS・Sが半町おき位にブラ〳〵と警戒して立つてゐた。晝間のうちも綠の服をきたゲーリングの武裝警察隊の姿は、あちらこちらに歩るいてゐる姿を見たが、名物のS・Rの者たちは完全にどこにも見られなくなつてゐた。これまでの伯林での突擊隊の人もなげなる橫暴ぶりについては私は實にいやになる程聞かされてゐた。S・Rの連中はどこへでも遠慮なしに大威張りで入つてくる。彼等が華やかな絕頂にあつた時などは、一寸ナチスの惡口らしいことでも喋つてゐるのをきかれゝば用捨なしにつかまへられる。どんな非道い目にあつても反抗などはとても出來ない程に彼等は圖にのつて天下を橫行してゐた。町はS・Rの行軍ばかり、これに敬意を拂はない素振りでもあればひどい目に會ふ、不愉快此上もない橫暴ぶりであつたらしい。六波羅の都

に、平氏に非ずんば人に非ずと專横の限りをつくした昔語はそのまゝにS・Rに適用して間違ひないものであつたらしい。大通りを制限外のスピードを出して平氣で奔らしてゆく立派な自動車があれば、それはきまつてS・Rの將校が乘つてゐた。カフエーで一ぱい飲んでゐる所へS・Rはずか〳〵と入つてきて失業者救濟の寄附を横平な顏をして强制する。さう云つたやうな話は、どれ程聞かされてゐたかわからない。それがこゝ四五日、清黨事件以後は、さしもに横暴きはまりなかつた彼等の姿が、町から一掃されてしまつてゐるのである。驚くべき大變化に相違ないのである。

夜に入ると銃をもつた正規兵の姿はいくらかふえた。人通りが少なくなつたゞけに辻々を警戒して立つてゐる彼等の姿は、流石に物々しい事件直後といふ感を抱かせはしたが、町は靜かにたゞ眞黑い闇の中に眠つて、何にも起りさうな氣配さへ感ぜられなかつた。所詮政府の言論機關の統制によつて完全に流言を封ぜられてゐる伯林は、目かくしされた靜けさの中に眠つてゐるのだと評するより他にないのであつた。

私はホツとしたやうな、張合ひのぬけたやうな妙な氣持で、伯林の夜を安らかに眠つた。

IV

革命とは古きものゝ根底よりの破壞である。大なる破壞には大なる力が必要だ。ヒツトラーが成しとげたナチスの大きな破壞の背後には大きな力があつた。力とは突擊隊によつて代表されたる武力であつた。これ無くしてはナチスの革命はなしとげられなかつた。だからナチス革命の當初にあつてはヒツトラーと突擊隊とは一つものであつたのである。

革命は成就した。舊きものは完全に破壞されてしまつた。破壞の次に來るものは勿論建設でなければならない。建設が成就するまでの動搖期には、その背後にこの大工事を擁護する武力が光つてゐなければならぬ。しかし建設が一通り出來上つてしまへば、何よりも大切なことは今度は安定といふことである。武力は最初のやうに社會を抑へる第一線のものではなくして、第二義の隱れたる力としての立場を守ればいゝことになる。爲政者としては民心に平和と安定を與へるのが第一義の必要事となつてくる。こゝに破壞期から建設期への大きな轉向があるわけである。

しかるに革命の破壞期にあつて最も實力をもつてゐた武斷派の人々の中には、所謂革命兒、破壞兒が多い。彼等は、あらゆるものを先づ破壞せよと現狀の打破を唯一のモツトーとしてひた押しに押し進む。そのすばらしい熱と力があればこそ大破壞も成就したわけなのであるが、不幸にも彼等は餘り革命兒すぎ、餘りに破壞兒すぎて、いかなる建設期にも適應することの出

來ない缺點をもつてゐる。彼等の革命によつて出來上つた新らしい制度に對してすら矢張り破壞の氣持が動き出すのをどうすることも出來なかつた。建設が進んで最早敵手を壓迫する爲の武力は第二義の地位を守らねばならぬ時が來ると、彼等は不平だつた。力で成しとげた革命だ。出來上つた時もその力の所有者はどこまでも第一の地位がほしかつた。そこに破壞期と建設期の轉向が來てゐることはわからなかつた。不平と不滿は彼等をして、自分達の陣營内に於てすら現狀打破を叫ばせる、革命に亞ぐに革命、破壞に亞ぐに破壞。不斷の革命兒の思ふ所は結局は建設者の念願とする安定と相容れぬ悲しむべき矛盾を生じてくるのである。

今度の清黨事件は結局かうした建設期の悲劇ではなかつたのか。私達は過去の歷史に於ていくつも同じやうな悲劇を繰返してきてゐる。武家政治から公卿政治への轉向期には剣で押したやうな同じ悲劇もくりかへされてゐる。

破壞の爲の破壞といふ觀念に生きる突擊隊の領袖連と、建設の爲の破壞といふ意識に生きるヒツトラーとは、いつかは血で血を洗ふ悲劇の破局を見なければ、おさまりのつかぬものであつたのに相違ない。

國民は、大衆は、この悲劇を見て寧ろ悅んでゐる。英國人などは人道上許すべからざるブルータルな行動だと非難してはゐるが、ドイツの一般人から見れば寧ろヒツトラーはブルータル

な連中を一掃してくれた有難い決斷だと考へてゐるであらう。それ程にまで突擊隊の連中の人もなげなる橫暴ぶりは、多數の民衆の內心の反感を買ひつゞけて來てゐたからである。

血の清算を斷行した翌日、ヒツトラーは、レームの後任として突擊隊長に任命したルツツエ氏をして同隊の將校連中に對して嚴乎たる命令を出した。

――突擊隊の將校が宴會費として每月三萬マルク宛を消費して居つたことを余は發見した。今後同隊の將校は純然たる國家的性質の宴會をのぞき、自ら招待し又は招待に應ずることを嚴禁する。

是等の宴會を常に催し來つた伯林の贅澤なる地區は直ちに閉鎖を命ずる。

余はまた突擊隊の領袖が贅澤なる旅行をなすことを嚴禁する。

突擊隊の兵にして飲酒にふけり、或は放埒なる所業をなすものは、人民の指導たる地位に立つべき資格無きものと認む。余は隊の指導者等が隊內の同性愛の習慣に留意し、これが責任者の發見次第、直ちに隊より放逐すべきことを命ずる。――

すべてかやうな命令で嚴禁された事は、それまでは平氣で日常行はれてゐたことなのであるから、清黨事件によつて伯林の大通りから人もなげなる樺色のS・Rの將校や兵達の姿が見えなくなつてしまつたことだけでも、市民にとつては、さぞ氣安い感を與へたであらうと思はれ

る。

一夕、私達は永井大使に招待されて、チーア、ガルテンにある日本大使館で晩食の御馳走になつた。大使には以前ロンドン大使館時代にも大變御世話になつたもので、いろ〳〵久濶の話をしておるうちに、當然清黨事件や突擊隊の話が中心に花が咲いた。そこで私は忘れられない印象の深い一挿話をきいた。

伯林にはあだかも御外遊中の賀陽宮殿下が御滯在中であらせられた。

五月二十九日、大使館ではドイツの閣僚を御招待になつた宮殿下の晩餐會が催された。規定の時間にはゲーリングを初めとして殆んど皆集つた。たゞ外務大臣だけが夫人だけ先きによこして、手放せぬ公用の爲めに一寸遲れるからといふ言傳てをしたさうであるが、もとより大使館でも誰れ一人それが何のためであるか氣にとめるものもなかつた。

宮殿下が御中心になつての晩餐會は極めて朗らかに愉快に進行した。ドイツ側の人々は何のわだかまりもなく悠々と落付いて、世間話などに時をすごし夜の十一時頃になつて辭して歸つた。永井大使を初めとして、あとで考へて見てもその時集つた人達の態度なり、話なりに、別に普段と變つた何の印象もうけてゐないさうである。

チーア・ガルテンの日本大使館の横にS・Rの本部がある。

翌朝、賀陽宮殿下が大使館の御部屋から窓の外を眺めておられると、朝がまだ早いのに突擊隊の本部の廻りを、二百數十名も居らうかと思はれる大勢の武裝警察隊が取かこんで騷然として居る樣子であつた。宮殿下は不思議に思召されて、永井大使に、大層隣りのS・Rの本部に武裝したものが集つて、たゞならぬ樣子であるが何事であるのかと御尋ねになつた。大使にも何のことか見當がつかなかつた。

やがて清黨事件の驚くべき報導が入つてきた。シュライヘルの銃殺もわかつた。早朝S・Rの本部を警察隊が襲つた理由もわかつた。

それにしても前夜、宮殿下の御晩餐會に列した人達が、この事件の大立物であつたことを考へると、恐らくゲーリングを初めとして誰れも、はち切れるやうな緊張した氣持を内に藏しながら、强いて落付いて悠然と席に連りながら、實は時間のたつのが氣が氣ではなかつたのであらう。さうして十一時頃に大使館から退出すると恐らくは夜を徹して脫兎の勢で豫定の行動を急いだのであらうと思はれる。

「全くアノ大きな事件の當事者達と、事件の起る數時間前まで談笑してゐて、私達にはふだんと變つた何の氣振りも見せなかつたのだから、エライと思ひますよ」

と永井大使は、こゝに宮殿下がお坐りになり、こゝにゲーリングがすわつてと、一々當時の

有様を手にとるやうに話してくれた。その同じ大使館の部屋で、同じ卓子に同じ椅子に倚つて、久しぶりの日本食を御馳走になりながら、私達は何となく底の知れぬ冷めたい強さをもつたドイツチエン・ツームの一端にふれたやうな氣がして、無限の感慨が胸にわいてきた。

旬日の後、私達は伯林を去つてブラッセルに向つた。

並木のリンデンの葉風の涼しい朝の町をドライブしながら、フリードリツヒ、ストラーセの停車場までかけさせてゆくと、伯林の町はもうどこもかしこも完全に靜かな、穩やかな日常生活を取戻して、着いた時にはまだそこゝの辻々に銃をもつた警察隊の姿が見られたのであつたが、今ではもうどこを見ても平凡な行人の姿ばかりで、いかめしい警戒の氣分は完全に影を消してしまつてゐた。

ジヤガタラ文の舊港

I

切支丹禁教が生んだかず〳〵の悲話は、大村での殉教者達の無惨な磔刑をはじめとして、三百年後の今日、私達の胸を痛くさせるやうな悲しい、いたましいものに滿ちてゐます。しかし私は、慘忍をきはめた島原、溫泉嶽の焦熱地獄の呵責や、西坂の刑場での林立した磔柱の焚殺の無殘さに、目を覆ひたくなるやうな痛ましさを覺えるのと同じ程度に、傳說に似たジヤガタラ文のうら悲しい物語に、以前から不思議な一種の感傷にうたれてゐたものでした。

世に傳はつてゐるジヤガタラ文は實際名文です。千はやふる神無月とよ、うらめしの嵐やといふ書出しから隨分長いくど〳〵しいものではありますが、

いつのとき日にか日本を出まゐらせ候や、いまはさだかにもわきまへがたふ、こなたのとし月にはなぞらへかたく、たゞよるひとなくふるさとの事、つかのまもわすれやらず、おもひなぐさむひまも御ざなく候。たま〳〵故郷にて見申たるにおなじものとては、月日のひかりばかりにて、そこもとにかはらず候ゆへ、ひるは日の出る方をながめ、夜は月の出るかたを打ながめ、袖のかはくまも御ざなく候

と書いてあるあたりや、文の終りの方などは讀んでゐてその人の心根を考へると涙ぐましく

なつてくるものがあります。

一、おたつさへ申まゐらせ候。こゝもとあつき國にて候ゆへ、それより少持わたりまゐらせ候をみな〳〵つかひきり候まゝ、ひようぶきやう一かい、此便にてたのみまゐらせ候、細々申たく候へども筆にはつくしがたく候。下のうばへも申まゐらせ候。すいぶん〳〵そく才におはし候へ。わがみもやがて歸朝いたし、御げんもじにて申まいらせたく候、あら日本こひしや、なつかしや、見たや〳〵。

一松かさ、この手がしわのたね。杉のたね、ほうきぐさのたね、御ゐんしんたのみまゐらせ候。かへす〳〵なみだにくれてかきまゐらせ候へば、しどろもどろにてよめかね申べく候まゝ、はや〳〵夏のむしたのみ入候。我身事今までは異國の衣しやう一日もいたし申さず候。いこくにながされ候とも、何しにあらゑびすとは、なれ申べしや。あら日本戀しや、ゆかしや、見たや、〳〵、〳〵。

じやがたら

は

る

ゟ

日本にて

おたつさままへる。

この有名なジヤガタラ文は西川如見の長崎夜話草に載せられておるもので、十四五歳でジヤガタラに流されたお春といふ混血兒の娘が、長崎に居るお辰といふ友達の所へ送つた哀切な思鄉の手紙だといふことになつてゐます。十四五歳で異鄉に流されてしまつた娘の手紙にしては全く名文すぎます。誰れかの戲作であらうといふ說は誰れも唱へておるところです。私もこんな名文をほんの小娘が書いて送つたとは考へられませんし、後人の作であることは疑ひがないやうに思ひます。

しかしこの有名なジヤガタラ文が全然架空なものであつて、誰人かの想像して書いたものだとするのもどうでせうか。

寬永十三年に時の閣老達連名の下知狀が長崎奉行に下つて

一、伴天連の子孫を殘置かざる樣堅く可申付事、もし違犯せしめ殘置く族有之に於ては其者は死罪一類の者は罪の輕重に依り可申付事。

一、南蠻人長崎に持ち候子並に右の子供を養子に仕る族の父母等は悉く死罪なりと雖も身命を助け、南蠻へ遣され候間、自然彼者共の內に日本へ來るか又は書面有之に於ては本人は勿論死罪、親類以下まで罪の輕重に隨ひて可申付事。

といふ嚴重な仕達があつたことは文献に殘つておることでもあり、現に同じ寛永十三年には長崎に住んでおつたポルトガル人や、その混血兒二百八十七名を媽港に流し、十六年には猶、長崎や平戸に殘つてゐた南蠻人や混血兒を十一人ジヤガタラに追放したといふ事實は明白であつて、その二度目の追放者十一人の中には、エゲレス女房の娘として春といふ名も見えておるので、ジヤガタラ文は根もないことを空想して書いたものでないことは明白になつてゐます。

恐らくはそのお春といふ娘から、幼友達のお辰の所へ異郷からはる〴〵稚拙な手紙が屆いたのは事實なのでありませう。それをもとにして誰れかゞ肉をつけ、化粧を加へて、すばらしい名文につくり上げてゞもしまつたのだらうと考へます。ですからあのジヤガタラ文は恐らく手を入れた戯作には相違ないでせうが、根もないことではなく巧妙なる改作と見れば一番當つておるのではないでせうか。私達が今それを讀んで見ても、飾り立てた美文調の所よりも、素直な感情の流露した稚拙な文章の方が心をうち、この手がしわの種や、杉の種、箒草の種を送つてくれなど〻書いてある所に、異郷の乙女心を思つて涙を誘はれるものがあります。もしも原文のまゝの稚拙で、まご〻ろのに染みでたものでも殘つてゐたら、どんなによかつたでせうか。戯作した人は名文に作りすぎて、本當の名文を殺してしまつたのではないでせうか。

それはともかくとして、お春の追放されたジヤガタラとは今日の爪哇のバタビヤであるのは

明瞭なことです。ジヤガタラ文の乙女らしいロマンスに心ひかれてゐた私は、三百年の昔に日本から流されたといふバタビヤへ行つて、昔を偲びたいといふ氣持を前からもつてゐました。幸にも今度その機會を持つて爪哇に行つてからは、バタビヤで日本の流人の舊蹟でもあるならば是非見たいものだと願つてゐたのでした。

I

スラバヤから一週間餘り山岳地帶を自動車で旅行しつゞけて、バタビヤに着いた時には五月も央ばをすぎてゐました。明るい日が照りつけるこの街には、月見草に似た黄色いマリーパンの花や、薄紫の朝鮮朝顔の花が、今を盛りと咲き亂れてゐました。こういふ花ばかり見てゐたのでは、ジヤガタラ文に、もはや日本の花などはみな〳〵わすれにし、と書きつけてあるのも無理がないと思はれるのでした。

私はバタビヤにつくとすぐ案内してくれる人達に、ジヤガタラ文のことを話して、何か舊蹟のやうなものでも殘つておりはせぬかと尋ねて見ました。別に日本から流された人達の住んでゐた家とか、部落とかいふものは何も殘つてゐませんと誰れも同じやうな答へでした。私は輕い失望を感じました。

バタビヤに着いた日の翌日、私は博物館を見に出かけました。何か三百年昔の日本の切支丹迫害の頃を偲ばせる資料でも並べてありはしないかと考へたのでした。

博物館は實にすばらしいものです。南洋文化と土俗研究の資料が、こゝ程充實して集められておる所は他には無いかも知れません。和蘭の東印度征服の歴史は、廣く立派な建築の中に手にとるやうに物語られてゐます。ジャワ本島はもとよりのこと、セレベス、バリーの島々の土民の習俗や民藝品まで實によく大規模な大集成をなしてゐました。私はバタビヤに來るまでにオノソボの附近にあるボルブドールの佛蹟を見物して豫想以上の大したものなのに驚嘆したものでした。七千坪からの面積をもち、二百尺の高さをもつ安山岩の大伽羅、それが全部世にもまれなる見事な佛像の彫刻で滿たされてゐる壯觀は、實際に見たものでなければ、想像も出來ぬものであらうと思ひます。ところがこの博物館に來て見ると、そのボルブドールの石彫藝術の粹が、ちやんと並べてあります。ボルブドールの偉大な壯觀などは、もとより博物館の中で考へられやうもありませんが、部分的の彫刻は實に立派な代表的のものが陳列してありました。何でも博物館へ陳列するために、時にボルブドールから大仕掛で代表的の彫刻を運んで來て、暫く出陳すると、それをまた元の所へ納めて、新らしいのをまた持つてくるのだとかいふことでした。それでは成程すばらしいものが見られるわけなのです。

スマトラあたりのトーテムなども見事な彫刻のものが、いくつあつたかわかりません。性器崇拜の石彫、木彫などもいくらでもあります。

中でも私の心をひいたのは、非常に珍らしい資料を豐富に集めた貨幣室で、セレベス島のブートン（Boeton）に行はれてゐたのだといふ布製の札がありました。一六一二年にセレベス島を探檢した者の旅行記が出版されてゐて、その中にブートンを目擊した記事が載つてゐるさうですが、それは宮中の官女が外國から渡つてきた織物を材料にして手製した札で、島内だけは自由に流通をするが、もし島外へ持出さうとすると、きつと其船は沈沒してしまふといふ迷信があつて、その爲めにこの變な札がセレベス島内だけで具合よく流通してゐたのだといふことです。現在の金本位國の金貨も、國外へ持出されるときつと船が沈沒するといふやうなことにでもなつてゐたら、金本位制の崩壞などゝいふ悲劇は起らないですんだかも知れないとおかしくなりました。

各部屋部屋が實に面白い珍奇なものに滿ちておるので、私は時の移るのも忘れて博物館内を見て廻りました。すつかり見終つて外へ出た時、何かまだ物足らぬやうな氣がして、やつと氣がつくと最初考へてゐたジャガタラ文關係のものがどこにもなかつたのだと初めて思ひ起すほど、博物館そのものが魅力にとんでゐたのでした。

だが要するに博物館でジャガタラ文の昔の匂ひを嗅がうとしても、それは無駄であつたのは事實でした。

「日本からの流人の舊蹟は殘つてはゐませんが、昔のジャガタラの町は今でも殘つてゐます。そこへ參つて見ませう」

と案内の人は云ひました。

Ⅲ

現在のバタビヤ市内と呼ばれておる區域は、ウエルトフレーデンと呼ばれる所で、出來上つてからまだ百年餘りの、云はゞ新市街であるさうです。昔ながらのバタビヤは今は舊市街となつてゐます。

何でも昔のバタビヤは濕氣の多い不健康地である爲めに、歐洲人には住み切れなくなつて、住宅地としてウエルトフレーデンに移つたのださうですが、この方は健康地でもあり、歐風の施設も完備したので、いつか商業區域としても、この方が繁榮になつて、バタビヤの本體になつてしまひ、舊市街の方は華商の街として殘されるやうになつてしまつたと云ひます。

實際それは街を一見すれば明白であつて、現在のバタビヤ、即ちウエルトフレーデンは、道

路も整ひ、公園も立派であり、建築物も全く歐風の完備した都市でありますが、舊市街は時代から取のこされた汚たない街でした。しかし私達にとつて有難いことは、舊市街が取殘されておるために、昔のジャガタラの面影をかなりに忍ぶことが出來るわけでした。

博物館を見物した翌日、私は舊市街に自動車を奔らせました。暑い日で街中を流れる川の中には女も男も大勢水浴をしてゐました。

新市街を出はづれると電車も無くなれば、家の模樣も變つて、世紀が急に後戻りしたやうな氣がしてくるのです。いはゆるバタビヤの舊港に通ずる入口に、ペナン門といふのがあります。昔はこれがバタビヤの町の門であつて、これを中心に城壁がめぐらされてゐたものだといふことですが、今は城壁などは形もなくなつて、昔風の眞黑な大きな門だけが、在りし日の面影を止めてポツンと丸で古い凱旋門のやうな姿をして立つてゐます。

門の所で自動車を降りて、中へ入ると左手に垣をめぐらした一劃があります。中を見ると一間ばかりの古く大きな大砲が、半分土に埋まつて横はつてゐました。砲の彈込めの所は握りこぶしの形になつてゐて、砲身にはラテン語で

"EX ME IPSA RENATA SUM"

と彫りつけてあります。何でもこれは、「余は余の體内より再生す」といふ意味なのださう

ですが、それに何かの別の意味を持たせたのでせうか、土人の間にはこの大砲に祈れば戀は必ず成り、この砲身の上にまたがつて祈れば子供をさづかるといふ迷信があつて、いつも祈るものが絶えないと云ひます。私が見た時には祈つてゐる人はゐませんでしたが、線香が煙り、供物なのでせう、廻り燈籠に柄をつけたやうな妙なものや、紙で出來た花の束などが澤山あげてありました。

この大砲にはもう一つ傳説があります。どつちが陰か陽か知りませんが、これと同じ大砲がバンタムにもあつて、何時の日か二つの陰陽の大砲が一つ所に相會ふ時は、ジヤワが完全に獨立してしまふのださうです。さすがにこの大砲をバンタムまでかついで行く物好きもないやうですが、和蘭からの獨立が、國民の關心事になつてゐる證左とも見られて一寸面白い氣がします。

この邊から海岸までの、さまで廣くもない所がいはゆる舊市街なのですが、和蘭がこゝを占領してから、本國の面影をそのまゝにうつした町を設計したわけで、縱横に堀割を作つてあります。治水の國としての和蘭の特長は何もバタビヤだけではなく、ジヤワ全島が實に行屆いた水利の便を持つてゐて、農業の發達はその恩惠から生れてゐることがよくわかりますが、その第一着手はこのバタビヤの舊港の設計から初まつたのでせう。實際こゝへ來て見ると三百年前

の和蘭の本國は、恐らくこの通りであつたのだらうと思はれるやうに、堀割と狹い道との交錯した古典的な風致がしのばれます。

橋や、堀割や、道路は古典的ですが、家と人とはすつかりかはつてゐます。海岸から入りこんだ入江に架けてある、これも古い和蘭式の跳橋を渡つてゆくとパツサル、イカンと云ふ魚市場があり、そのうしろが雜貨、衣服その他、日用品の市場になつてゐます。誰れだとてこゝを通る時には鼻をつまみ、目を閉ぢてゞも居らねばやり切れぬ程、異臭と混雜にみちてゐます。魚河岸と水天宮の緣日とを一所にしたやうな所だとでも形容したらその一班だけは思ひ浮べられるかも知れません。

市場から後返りをして橋を二つばかりも越えると、有名なポルトガル教會堂があります。一六九三年にたてられたもので、今もそのまゝに殘されておるので、舊バタビヤを偲ぶ貴重な資料です。私のやうな古建築物に一向何の智識も持合せてゐないものでも、そのがつちりした、素朴のうちに神聖さを見せた樣式には心をうたれるものがあります。

この附近一體の街が、ジヤカトラと呼ばれておるのです。ジヤガタラといふのは勿論ジヤカトラの日本流の訛に違ひないのです。日本からの流人はこのあたりの一劃に住んでゐたからこそ、ジヤガタラ文の名も出たのでせう。さう思つて私はポルトガル教會から出ると、暫く道に

立つてあたりを見廻しました。教會の前の道をへだてゝ堀割の川が流れて、向ふ岸には低い土人の家が立つらなつてゐました。人通りはほとんどなく、白つ茶けて靜かな道を、川を、家を南國の晝の太陽が、暑くあつく照してゐるだけです。川岸に立つ椰子の木の並木は、風のない爲めか眞つすぐに天をついて、黑ずんだ大きな葉の固りがそよとも動きません。見るからに暑い、白々とした風光です。こんな所に、山水草木の美くしい日本から流されて來た者の生活がいかに落莫として、うるほひなきものであつたかは誰れにも容易に想像されます。

ふと見ると、向ふの川の中の、筏の影に二三人の土人の女が半裸で頻りに水浴をしてゐます。ジャバへ來ればいや應なしに街の中の川で、水浴をとる男女の不思議な姿が、日常茶飯事として氣にもかゝらなくなります。暑い國だから水ばかり戀しがるのは仕方のないことでせうが、それにしても川の水は何と多方面に利用されてゐることでせう。土民はこゝで水浴をして暑さをしのぐと同時に、川は便所の代りをします。食器を洗ふ所にもなれば、洗濯場でもあるのです。晝頃までのどの川を見ても、まるで雜魚の群らがるやうに、半裸の男女がバチヤ〳〵水をはねとばして浴をしてゐますが、岸ではサロンの陳列會のやうに色とり〴〵の洗濯ものが干してあるし、皿を洗ふものもある。その一間と離れてゐない所では妙な恰好に、水の中にしやがみこんで糞をしてゐる男がゐます。食器を洗ふものも、浴するものもすぐそばの水で糞を

されてゐて平氣なのだから驚き入つたる光景です。

私は暑い日を浴びながら、ジャカトラの街道に立つて、前の川で頻りにバチヤ〳〵水浴をしておる女達を見てゐるうちに、ジャガタラ文を書いたお春がこゝに來てどうして暑さをしのいだらうかと思ひました。手紙の中に、まだ異人の服はきたことはないと書いてゐるお春としては、土人達のやうに汚たない川での水浴をする勇氣は無論なかつたでせうが、それだけに酷熱のその日〳〵を、さぞつらく過したことだらうと、あはれな氣がしてきました。

ジャカトラ街道を少しゆくと、左手に往來から少し入つて垣根のやうな塗喰作りとも見える壁が立つてゐます。その壁の上には、矢張り塗喰作りらしい人間の頭蓋骨の形をつくつたものが、丸で獄門そのまゝに置いてあつて、頭蓋骨の眞頂上に槍が一本貫かれて立つてゐます。甚だ不氣味な飾りものですが、これはジャカトラ街の一名物になつてゐるもので、一七二二年に土人との混血兒が和蘭人を皆殺しにしやうとの大陰謀を企てたのが、土人の女の密告によつて暴露し、一味のものは刑に處せられ、その首謀者のピーター、エルバーフエルドといふ男は、その罪を永久に記念する爲めに、かうして模型の首をさらしものにしてあるのだといふことです。首はいかにも陰慘な悲痛な顏付をしてゐます。首の下に彫りつけてある文句によると、このあたりは反逆者を記念するため、家もたてゝはならぬ、一木一草も植えてはならぬと書いて

あります。恐らく當時の土人達の感情から云へば、かうでもせねば、きつと花をさゝげ、香を焚くものが出來たに違ひなかつたのだと思はれます。和蘭にとつてこそ反逆者ではありませうが、ジャワの民衆から見れば、民の爲めに立つた勇ましき革命兒に相違ないのですから。

私はこの革命運動を起したビーター、エルバーフエルドの時代と、ジャガタラ文のお春の時代とを年代から考へて見ました。長崎夜話草に誌す所によりますと、お春は「此女年たけて後唐人に嫁し子などあり、日本へたび〳〵文おこせたり。元祿九年の比までながらへ、七十六七歳にて死せしよし便りに聞え侍りぬ。そのゝち子なるが文おこせしかど、公けより止めさせ給ひて、のちにいかゞ成行けんしらず」と書いてあります。もしこれが本當だとすれば、お春がジャカトラへ追放されたのが寛永十三年で、それから十四の年から七十六七まで生きたのだとすれば、シャワに六十年以上ゐたことになります。死んだ年は西暦に直して見ると一七〇〇年頃です。一方、エルバーフエルドが刑死されたのが一七二二年ですから、お春が死んでから二十年ばかり後の出來事になります。

私の想像は限りなくのびてゆきます。エルバーフエルドは混血兒で、和蘭人を一掃しやうといふ革命の企てをジャカトラの町で起した男です。お春も唐人に嫁して、子を生んだとあります。子供は申すまでもなく混血兒で、ジャカトラに住んでゐたわけです。さうしてお春の子供

だとすれば、同時代に正にエルバーフエルドと大して年齢はちがはない筈です。さう考へてくると、エルバーフエルドの革命の一味の中にお春の小供は參加してゐても一向不思議はないやうです。小供から來た文が公儀から止められて、いかゞ成行きけん、知らずと片づけられてゐるこの物語には、想像をつけ加へさへしたら立派な後日譚が創作出來さうです。暴逆に抗して立つ日本人の血が、人に知られないで南國のある日に輝いたことがあるとしたら、ジャガタラ文も生きませう。私などには迚も出來る筈もありませんが、誰れか文筆の士の中で、これを想像に生かして、一篇の史譚か、戯曲にでもしてくれる人があつたら面白からうと思ひます。

私はそんなことを考へながら、暑い日の中を、別に何の獲物もなかつたジャカトラ街から離れてゆきました。しかし博物館とは違つて、昔の面影の多分に殘つてゐるこの古いジャワの港町は、私にほのかながらも日本の流人の生活を偲ばせてくれるよすがにはなりました。

私はもうそれだけで滿足して、次の豫定である、パツサル、ブツサルを見るために、待たせておいた自動車に乘りこみました。

世界的二選手を偲ぶ

朝シンガポールを出帆したB・Oの巨船コルフ號は、さはやかな夏の潮路をわけて、一路西に向つて進んで行つた。

陸地の影が見えなくなつてからは、南國の海は、深い淺黄の浪のうねりが、あくまでも明るい太陽の光を吸收して、甲板に立つて眺めてゐると、寶石のやうになめらかに美くしい。小さな飛魚が、船のかげに驚いてか時々稻田に群がる蝗のやうに、三四間づゝも群をなして、浪の上をとんではまた波にかくれる。あくまでも明るい遠くの水平線の上には、眞白な雪の峰が、もく〳〵と盛上つてゐる。

海ばかり眺めてゐる船旅は、あらゆる地上の出來事から解放される氣安さと共に、なすこともない無聊な安易さに、からだをもちあつかつてしまふ。英國船である爲めであらう船客は英國人が大部分を占めてゐる。日盛りになつてからは、朝のうち甲板を小犬のやうにはね廻つて遊んでゐた可愛らしい小供達の群も、晝寢でもさせられてゐるのであらう皆部屋へ引こんでしまつて、若い元氣のいゝ者達はバーに入りこんで、ヂンでも嘗めながらブリツヂに耽つて居るし、甲板には活動は停止してしまつてゐる。さつきまで甲板の一角に藤の卓子をすゑて、頻りに船客に船の速力を充てる時の、トーテをすゝめてゐた街の親分と云つたやうな酒肥りの赤ら顏の男も、いつか見世をしまつてバーに引上げて行つてしまつた。あとには老人の夫婦連れ

や、女連中が甲板にならべた長椅子の上に、陸揚げされた鮪のやうに、だらしなく長く伸びて輕い小説によみふけるか、居眠をしてゐるものばかりである。

船は單調で、退屈な、どこにゐても暑い永い日を、動きのない靜かな客をのせて、靜かに油のやうな穩かな海の上を辷つてゆく。

やがて日が落ちる。

落日の一時は空も海も錦繡のやうに美くしい多彩な色に染められる。照り榮える大きな紅玉に似た太陽を中心に、茜に、みどりに、薄紫に、薔薇色に、繪にもかけぬ美くしい色の變化を見せた水平線上の雲のいろどりが、そのまゝに水を染めて、あざやかにも華麗な風光を見せてくれる。晝間の暑さはいくらか減つて海の上を渡つてくる夕風は凉しい。その風を樂しみながら、落日を甲板から眺めやる一ときは、南國の海の旅路のたゞ一つの變化にとんだ樂しみであるかも知れない。海に落ちて行く太陽は陸で見るよりも大きな感じがする。

しかしそれもほんの一時で、浪に沈んでゆく太陽の足は早い。ほんの少し前まで、さしも華やかな色に染められてゐた空も、見るまに光を失つて、一樣に夕暮の薄明りの中に溶け込んでしまふ。やがて一抹の微かな色が、しばらく水平線のあたりにたゆたふと見るまに、あたりは見る〳〵暗くなつて、夜の闇が海も空も一面に薄墨色の世界に塗りこめてしまふ。

晩飯の用意を知らせるラッパが遠くの方から元氣よく響いてくる。甲板に立つて夕日を眺めてゐた人達は、それ〴〵着換へをする爲めに自分達の部屋に引上げてゆく。

私達も自分の部屋へ下りて行つた。ドアをあけて入ると、綺麗にカヴーのかけられたベッドの上にこれから食堂へ着て出るタキシードがきちんと疊んで置いてある。ネクタイからカラー黑の絹の靴下まで一揃へずらりと陳列するやうに揃へて並んでゐる。私はこんなものを一つ所に纏めて置いたわけではなく、方々の曳出しに別々に入れて置いた筈だのに、部屋のボーイは英國人らしい克明さで、方々の曳出しから探し出して揃へて置いてくれたものと見える。氣の利いたサービス振りは有難いが、どの曳出しも自由にかき廻されたのだと思ふと、別に見られて惡いものは何一つ持つてはゐないが、それでも一寸輕いいやな氣持がしてくる。

晩飯をすませたあとで、私達は讀書室に入つて、これから先きの旅程やら、國々の經濟事情やらの研究に取かゝつた。靜かな海を巨船は動くとも見えぬ靜けさで動いてゆく。

讀書室に立籠る人達は皆いかにも靜かだ。晝間トーテの世話役をしてゐた赤ら顏の男が、今度はあさつての晩とかに、甲板で競馬遊びを催すので、その馬券を買へと奬めに來たが、誰れも餘り見向きもしない。大聲立てゝ甲板競馬の面白さをわめき散らして、一等が一磅だとか二磅だとか云つてゐた男が、あきらめたやうに部屋から出て行つてしまふと、あとはまたこつき

りと靜かになつて、やわらかい木犀の花のやうな電燈の光が、つゝましく本の頁を操る婦人達を、山莊の夜に似た靜けさの中に浮き上らせて居るばかりである。

部屋の正面の、凝つた木彫で飾つたマントルピースの眞上に掛つてゐる大時計が、十時に近い時を示した。

「では皆、Bデツキへ集りませうか」

と私は時計を見上げながら、一所に讀書してゐた一行の人達に言葉をかけた。

今夜もうすぐに船はマラツカ海峽を通過する。

その時刻を見計つて、一同はこゝで數ケ月前に海に投じて悲痛な死を遂げた佐藤次郎選手の靈を弔はふと申合せたのであつた。

B甲板まで下りてゆくと、一行中の關西庭球界の若き花形である不破君を初めとして、六七人の人がもう集つてゐた。暗い甲板にタキシードの上衣の白だけが、ほのかに浮び上つて夢のやうに淡く見える。

やがて十四人の一行は皆甲板に集つた。不破君が特にシンガポールで造らせた十四の花束は皆の手に渡された。グラヂオラス。白菊。カーネーションなどの美くしい可憐な花片は露を含んでしんみりとぬれてゐた。

南國らしい生溫い夜の風が海面を渡つて吹きすぎてゆく。私達は肅然として暗い中に整列した。誰れも言葉を出すものが無い。

「では不破君、佐藤選手の冥福の爲に、君からどうぞ」

と私は云つた。

不破君は默つて手摺に近よつて、暫く海面に淋しさうな眼を落してゐたが、手にしてゐた花束をパツと海の上に投げた。私達は皆それに倣つた。十四の花束は音もなく靜かに、一瞬の闇を白く切つて海面に落ちて行つた。

私達は皆一齊に頭を垂れて、今は亡き世界的選手の爲に、しばらくの默禱をした。

眞黑な海の果から、また生溫い潮風が甲板をかすめて吹きすぎてゆく。目を落せばたゞ一面に黑い海面に浪がしらだけが白く飛沫をあげて、船の走るまゝに、あとへ〳〵と流れてゆく。

この海に、この浪に、一夜思ひ餘つた身を投じた佐藤選手の當時の有樣を思ふと、今眼下に見える眞黑な水の色にも、魔の手がひそんでゐるやうな氣持にもなつた。チルデンの時代去つて、ペリーにうつり、今はクロフオードが天下を支配してゐるが、次に來るものは當然佐藤時代として庭球日本の名を世界に轟かす日が期待せられてゐたものを。暗然として海面を見つめて立ちつくした私達の誰れの目にも涙があつた。

無限の沈默を守る夜の海は、どこまでも果てしなく黑い。

夜はいつか更けて、さすがにやゝ肌寒くなつてきた。皆默然として靜かに甲板から離れてブリッヂを上つて行くと、星も見えぬ眞黑な空の一角に、八日ばかりの薄月が、亡き人の靈のやうに、白く淋しく光つてゐた。

プラーグに着いた翌日の朝、私達はサイトシーイングの第一歩として、シチー・ホールに無名戰士の靈を弔ふべく自動車を奔らせた。

シチー、ホールの前で降り立つてまづ私達を驚かしたものは、そこの入口から往還一面にかけて雀の子のやうに百人以上も群をなして集つてゐた小學校の生徒であつた。いや、小學校の生徒が大勢、名所を見學して歩るく光景ならば、日本でも散々見馴れた光景である。私達が驚いたのはその澤山に集つてゐる少年少女達の服裝であつた。

女の子はすべて綠の運動服を着て帽子は眞赤なのをかぶつてゐる。男の子は帽子が綠、見るからに氣持のいゝ眞白な服に、綠色の半ズボンで長い脛をむき出しにしてゐる。元氣のいゝ少年少女が、こういふ派出な凛々しい服裝で大勢集つてゐる光景は、夏の花園よりも美くしく、すが〳〵しい感じを與へるものである。

この一群をひきいてゐる、頑丈な體格をした三四人の男は、上衣を左手だけ通した伊達な姿で、下にきた眞赤なシャツが半分見えてゐる。いかにも小氣の利いたスマートな感じのする姿である。本人達もその姿が得意らしい。

「あれは何の團體ですか」

と私は案内のものにきいて見た。

「プラーグの近郊から出てきた小學生達で、赤シャツを半分見せてゐる伊達姿の人は皆體操の先生です」

といふ答へだつた。

今はソコルの競技場でプラーグ近郊から集まつて來てゐる小學校生徒の大競技會が開かれてゐる最中なので、かうしていたる所に小さい學生が多いのだといふことであつたが、とにかく色彩の美くしい運動服の大集團は、プラーグの第一印象として、はつきりと私の頭に燒きついてしまつた。

町を見下ろす丘の上の古い教會堂へも行つて見た。愛宕山ほどの高さと廣さを持つた丘に、大きな古典的な寺院が青空をついて立つてゐる姿は壯嚴な感じのするものであつた。見下ろすプラーグの町も繪のやうに美くしかつた。しかしこゝでも私の印象に殘つたものは、禮拜堂の

美くしさや、建築美をつくした尖塔のいたゞきに漂ふ白雲の面白さよりも、寺内のいたる所に雑踏してゐた運動服の少年少女と小意氣な體操教師の群であつた。

勿論、それから見て廻つた大きな競技場を初めとして、いたる所に綠や白の服と赤や綠の帽の氾濫が待つてゐた。

運動の國チエツコスロバキヤ。體育第一主義の教育の都プラーグの姿は、いやになる程、强く印象づけられた。

だが夕方になつてホテルへ歸ると、チエツコといふ國は決して日本人にとつて住心地のいゝ國ではないのが直覺されることばかりであつた。ボーイの態度は底に融和し難いつめたさがあつた。ウキーンのホテルでは帳場の男や、ボーイ達が私達の顏を見ると、コンバンワとかコンニチワとか片言の日本語を得意さうに、ニコ〳〵しながら話しかけた。聞いて見ると歐洲大戰の時に捕虜になつて松山で覺えてきたのだといふやうな昔話をした。成程敵國であつたのだから今でも反抗心をもつてゞもおるかと思ふと、彼等のどこにも惡意などは毛頭もつてゐないのが、こちらにちやんと感じられてきた。しかるにこのプラーグのホテルではボーイ達は皆愛想がない。他の國の旅客には馬鹿に叮嚀でありながら、日本人に對しては通り一遍の冷めたい態度であることが露骨にこつちに感じられて來た。

旅人としての神經の鋭さから、私達はどこの國でも一晩ホテルに泊り、一日街を歩るけば、その國の空氣をすぐに直感した。チエツコスロバキヤは、決して日本を尊敬もして居らなければ、好意も持つてはゐないことが第一印象として、不愉快に頭にきざみこまれることばかりであつた。國際聯盟第一主義の國として日本に好意のもてやう筈もなし、經濟上からも競爭國の地位に立つ日本に、小癪に障る感情を藏しておるであらうことは十分に察知してゐても、旅行者としては決して愉快なものではなかつた。

晩食のあとで、私は廣間の長椅子にゆつくりとからだを休めながら、新聞をよんでゐた。煙草がなくなつたのでボーイをよんで、持つて來させると、若いその男は全く事務的に煙草だけ渡してさつさと立去らうとした。

「ソコルの競技場で、學生の大運動會があるといふが、いつやるのかね」

と私はきいて見た。

一旦立去らうとしたボーイは、私の前へきて、明後日ですと答へたが、運動のことは好きな男だと見えて、今度は乘氣になつて頻りにプラーグの競技場がいかに大規模な、世界的なものであるかを得意になつて話し出した。

私はひまな夜だつたので對手になつた。そのうちに日本のスポーツの話になつて、こゝで最

後の活躍をした人見さんの話が出た。

「オー、ヒトミ孃」と云つてその男は抑へ切れないやうな尊敬の色を目に見せた。

私が人見さんとは同じ新聞社の同僚であつたこと、人見さんがいかに立派な代表的のスポーツの權化であつたか、日常の生活がいかに新聞社の仕事を通して、精進そのものであつたかなどを話すと、その男はもうすつかり心醉した様子で、大毎の社員といふことで私に對してすら、今までには見られもしなかつた敬意を拂ふ様子があり〳〵と見えてきた。私は實に愉快になつた。

チェツコで人見さんの名を知らないものは一人もない。日本の總理大臣は誰れも名を知らないが、人見さんは知つてゐる。毎年の人見さんの命日には寺院に集つて運動家が冥福を祈る祈禱をする。こゝでは人見さんは、人種をはなれ、國別を忘れた清らかな崇拜の的である。

私は最初非常に不愉快であつたプラーグのホテルがその夜から、すつかり居心地がよくなつてしまつた。冷淡だつたボーイは人一倍親切になつた。

スポーツは最上の外交である。さうしみ〴〵と感じながら、私は今更のやうに在りし日の人見さんの姿をまざ〳〵と思ひ起した。

鰐を喰ふ

I

熱帶地方の旅行では果實はうまいものが澤山食へる。果實の女王と云はれるマンゴスチンなどはジヤバあたりの田舍では値段も馬鹿に安いので、土人から澤山買つていくらでも食ひたいだけ食つた。兩手で握つてボクリと二つに割つて、中のあまい果肉を器用に舌の先にころがせるやうになると、いくら女王でもあきてくる。王樣のドリアンはバイテンゾルフの植物園の門前で土人が木からもぎたての新鮮なやつを賣つてゐるのを加藤子爵が一つ買つた。五十五セントだつたから、當時の爲替相場に直せば日本の金で一圓三四十錢になる。小供の頭より大きな見事なもので一向高いとも思へないが、それでもドリアンが賣ると、質屋が繁昌して、女郎屋がひまになるといふ有名な話を誰れでも知つてゐる程だから、土人にとつては高價なものには違ひあるまい。土人が山刀を出して器用に立割ると蜜柑の房のやうに眞白な果肉が並んでゐる。さすがにとりたての新鮮なものだけに、上等なクリームを固めてつくつたやうな果肉の味が、すばらしい風味であつた。

しかし果物ならばいくら珍らしいものでも、少し古いもので我慢する氣ならば、日本でも千疋屋で大がいは手に入る。何か日本ではどうしても食へないもので話の種になるものはあるま

いか、など〻最初笑談に皆し合つてゐたことが、とう〳〵本當に鰐を料理して食ふことになつてしまつた。

シンガポールに龜屋といふ熱帶動物の剝製や土産物類を賣つてゐる店がある。一行中の東洋製罐の間島君が、別府で鰐の溫泉飼育をやつて大分有名になつてゐる同社の高崎專務に依頼されて、生きた鰐の子を五六匹買ふのだといふので、私も三四人の人と一所にその店へ出かけて行つた。

龜屋の親爺はとても愉快な男だつた。小さな店ではあるが、壁から天井まで隙間もなく、小さな博物館のやうに奇怪な剝製動物で一ぱいになつてゐる。虎、鰐、大蛇、大トカゲ、海龜の類から、象の子供まで、皆、硝子の眼玉を光らせて、生きてゐるやうに足を突張つて、押合つて並んでゐる樣子は、正にグロの見本室とも評すべきものであつた。親爺は、足のふみ場もない程ゴタ〳〵と亂雜に品物をならべた店に、窮屈に並べた椅子に私達を招じながら、いろ〳〵と面白い南洋の動物狩の實驗談をやつた。イカモノ喰ひの味になると親爺の經驗はまたすばらしく豐富だつた。

「鰐の味も一寸輕くつてい〻ものですがね、うまいのは錦蛇ですよ。何しろこいつは、ずう體が一丈七八尺から二丈もあらうといふ大きな奴なんですが、おとなしいやつで一向人間には意

氣地がないんです。しかしアメリカから何十枚揃へろなんて皮の注文はいくらでもあるし、昔のやうに澤山はとれなくなりましたね。私の所でも隨分澤山剝製にしますが、工場の職工なんか、けふは錦蛇の皮を剝ぐんだといふと大變な騒ぎでさ。皆してうまい肉の御馳走になれるぞつて樂しみにしてゐるわけでしてね、エ、、煮て食ふんですが、どうして仲々い〻味ですよ。大トカゲも一寸乙な味ですな。い〻え土人なんか存外そんなものは喰はないものでしてな、大トカゲは支那人が食ひます。何あに、うまいから食ふんぢやない、養生のために藥の代りに小供に食はせるんで、あれを小供に食はせますとね、恐ろしいもんぢやありませんか、からだ中に一面にできものが吹き出しますよ。支那人はかうしてからだ中の毒を外へ出してしまふんだといふんで小供に食はせるんです。何あに私達あいくら食つたつて、外へ出る毒なんかありやしませんがぬ、アハ、、、、」

と聞いてゐると實に面白い。

大がいのものは食つても毒になりさうではなし、それなら鰐を一つやつて見やうかといふことになつた。時の勢といふものは實に變なことを平氣でやつてしまふものである。餘り龜屋の親爺が何でもなささうにイカモノ食ひの話をして、もしお望みなら虎がとれた時に味噌漬にして送つてもい〻など〻云ふものだから、それなら一つ鰐をたのむといふことになつた。

私達は三ケ月足らずで、また歸りにシンガポールへ寄港することになつてゐる。その時には是非生きたい〻鰐を用意して置いて、料理して食つて見たいが引受けるかと間島君が云ふと、龜屋の親爺は、引受けますとも、すばらしい奴を見付けておいて料理して上げますと、易々と請合はれてしまつた。

これで私達は鰐を食ふ約束をいや應なしに取交はしてしまつたのだつた。

Ⅱ

それから私達はシンガポールを去つて、コロンボからボンベイに行つた。

ボンベイでは忙しい日が續いて鰐を食ふ約束などはすつかり忘れてしまつてゐたのであるがボンベイから中東へ渡る汽船が、カラチへ寄るとそこで一日一晩碇泊するので、いろ〳〵と見物して廻つてゐるうちに、少々いやなものを見てしまつた。鰐寺といふ所での出來事である。

インドも西の果のカラチまでゆくと、インドらしくなくなつて寧ろアフガンやペルシヤあたりの色と匂ひが濃くなつてくる。港に近づいて船の上から見ると、ギラ〳〵と暑苦るしくうねる大きなインド洋の波の向ふに、一面にたゞ白つぽい陸が見える。麥こがしを口一ぱいに頰張つて白日の下に立つやうな、カサ〳〵とむせつぽい感じが、まづ第一の印象としてこつちの目

に鼻にとびこんでくる。

上陸して見るとこの第一印象は間違ひのないことがます〳〵現實に具體化されてくる。どこもかしこも風化した土と岩との白つぽい埃だらけである。家も道路も並木も、すべてむせつぽい埃風の中に埋もれてゐると云つてい〻。水分のなくなつたカサ〳〵の沙漠の街だ。こゝに住む人達のうるほひのない生活の落莫さが思ひやられる。

街を歩るくと強い日光が家の影を濃く道に落して、何の趣もない單純な白い道路を、馬の代りに首の長い駱駝が、荷車をひいていくらでも通る。何の刺戟にも無感覺になつたらしい魯鈍なこの動物の、のろ〳〵した歩るきぶりを見てゐると一層暑苦るしく感じてくる。

私達は上陸した日の午後、日盛りの少しすぎた頃を見計らつて郊外へドライブをして見た。ガンヂー、ガーデンといふ、青葉の茂る大木が林をなして、目に痛いやうな紅や黄の花が咲く花園などをもつた、こゝだけは公園らしい涼しい木影に富んでゐる一角を通りすぎて、人家から離れると、あとはもう一面の沙漠風景になつてしまふ。ゆるい勾配の丘が起伏して限りなく續いてゐる中を、白い路がうね〳〵とうねつて遠くへ消えてゆく。見るかぎり碌に木らしい木はなく、シャボテンとからたちに似た灌木の茂みが、禿頭病にかゝつた頭のやうに、斑らに生えてゐるだけである。からたちに似た棘ばかりの灌木には、ぼけのやうなドス紅い花が、人を

馬鹿にしたやうに咲いてゐる。恐らくドライブとしてこの位無趣味で單調な道も少なからう。風でも涼しければ、まだしもであるが、灼けた砂の上を亘つてくる風は、埃を舞はして無暗に暑い。

この道を一時間餘りはしると溫泉場につく、有名な溫泉場だといふので降りて見たが、椰子の林にかこまれた小さな貧弱な部落で、溫泉は野天の石造りの湯槽に、眞黑な土人達がぼしやぼしやとつかつてゐる。私達が近づくと皆、妙に敵視したやうな目をしてギヨロリとにらむ。天刑病にきくとかで、こゝにはさうした病人が入りに來てゐるのだときくと、溫泉に手を入れる氣もしなくなつて、そこ〳〵に引かへす。割禮の標本をまざ〳〵と見せびらかしてゐる眞裸の男の子や、乞食のやうに汚たならしい女の子などが、物珍らしさうにゾロ〳〵とあとからついてくる。氣味のわるいこと夥しい。一つ寫しておいてやれと、十六ミリをふりむけると、獵師に追はれた鹿のやうに、目の色をかへて夢中になつて遠くの方へ逃げて行つてしまふ。何だか無性に腹が立つてくる。

今度は鰐寺だといふので又自動車を奔らせる。落莫たる平坦な埃の道をいゝ加減行き盡した所に、椰子の木の茂り合つた小さな部落のやうなものが見えてきた。下りて見ると岩だらけのデコボコした丘の一角に古ぼけた寺が立つてゐる。何の見どころもない此小さな寺が、何も有

名なわけではなく、こゝに飼つてある云はゞ使ひ姫とも云つたやうな鰐の群が珍らしいので、カラチの一つの名物になつてゐるらしい。寺内、と云つても別に圍ひがあるわけではなく、本堂のそばにあるから寺内だらうと思ふのであるが、そこに四五十坪位の小さな泥池がある。池のまわりには高さ五尺程の土塀をめぐらして、大きな葉の茂つた木が池を暗くするほど圍りに立並んでゐる。

土塀の上から池をのぞいて見ると、四五十匹のすばらしく大きな鰐が、泥水の中に醜い背中を並べてゐる。鰐はまるで動きもしないし、ドロ〳〵の沼池の中につかつてゐるので、泥だか鰐だか一寸見ては見わけがつきかねる。

こゝへ參詣するものは鷄か羊を鰐の犧に捧げるのがきまりになつてゐるといふので、同じやるなら羊をと、そこらに大勢立よつてきた土人達の中の大將株らしい男に命ずると、その男はすぐに阪道をとぶやうにかけ下りてどこかへ行つてしまつた。暫らくすると男は眞黑な小羊の首に繩をつけて引張つてきた。今殺されて鰐に食はれてしまふ運命だとも知らずに、よた〳〵と可愛らしい柔和な目をして歩るいて來る小羊を見ると、何だか哀れな氣がしてならなかつた。

男は私達に一應その羊を見せると、すぐに池の土塀の際にある大木の根もとに引づつて行つ

た。男がひよいとしやがんだと思ふと、いつどこから出したのだかわからぬが、太くたくましい腕をまくり上げた手の先きに小刀が一挺光つた。あつと思ふまに、小羊はそこへねぢ仆されたが、次の瞬間にはギャーツといふやうな奇妙な聲がして、次に私の見たものは四本の足を突張つて首をぐたりとさせた羊のべたつと仆れてゐる姿だつた。咽喉の所から濃い血が吹き出して、ドロ〳〵と白い砂の上に流れ出して來た。私はいやな氣がして思はず目をそむけてしまつた。

荒くれた男が三四人集まつてきた。さうして血だらけの羊の死骸は見るまに皮をくり〳〵とむかれて、骨のついたまゝの肉は、ずだ〳〵にいくつかの片に叩き切られてしまつた。情けも用捨もないこの連中は、お互ひに血だらけの手に羊の肉をつかんで、何かわめき乍ら土塀の所へ近よつて行つた。中には肉や骨をかゝえたまゝ、塀の外から池の中へ太い枝をぬつと差出してゐる大きな木の上に登つて行くものもある。

驚くべき變化が池の中に起つた。それまでは死んでゐるのか、眠つてゐるのかわからぬやうに、じつと動かずにゐた數十匹の大きな鰐は、羊の肉の匂ひを嗅ぎつけたのか、それとも男達の姿を見て習慣性になつたのか知らぬが、急に活潑に運動しだした。

羊の肉が池の眞中に投げられた。のろまのやうに見えてゐた鰐は、鋭い尾で泥水をはね上げ

醜怪な首を空中に高くあげて、すばらしい猛烈な勢ひで爭ひながら肉を奪ひ合つた。三四人の手から續いて羊の肉が投げこまれると、池はまるで修羅場のやうな、餓鬼の打うつ淺ましい戰場となつてしまつた。私は鰐がこんなにまで猛烈な活動をやるのを見たことがなかつた。凄くもあれば醜惡でもある。

一きは目立つ大きな肉のついた骨が空中を切つて投げられた。すると灰白色のドロ〳〵の圧水でまぶしたやうになつてゐた一間半もある巨大な奴が、水のしぶきをぱつと切つて空中に半ば飛び上つた。落ちてくる肉を大きな口でかつとうけとめると、水中にうごめいてゐる五六匹の鰐の頭を抑へつけたまゝ、まるで月にうそぶく猛虎のやうな恰好をして長い頸をもち上げたまゝ、モリ〳〵と肉を嚙みはじめた。鋭い刄のやうな白い齒。その齒の間から、さつきまでヨタ〳〵歩るいてゐた黑い羊が、見るまに嚙みくだかれて血をたらしてゐる。鰐はさもうまさうに眼を細くしてゐるらしい表情だ。

この一幅の凄さまじい生物相喰む光景をじつと眺めてゐるうちに、私はふとシンガポールの鰐肉試食の約束を思ひ出した。この醜怪な奴の肉を今度はこつちが食ふのかと思ふと、いやな氣がしてきた。何だか後悔に似たものがこそばゆく腹の邊をくすぐつて通りすぎて行つた。

Ⅲ

それから又忙しい旅が續いた。

中東からバルカンとアラビヤ人やトルコ人の中にまぢつて灼熱の地方を經めぐつた末に、歐洲に出た頃には、永い間の未開國巡禮から解放されて久しぶりに文明の風に吹かれた心安さから、私達はもうすつかり文化人らしい生活を取もどしてゐた。實際伯林の美術館で巨匠の名畫に眺め入つたり、巴里のフォリー、ゲルゼールで、いゝ婆さんの癖に鹽辛聲を出してお轉婆に唱ふミスタンゲットの歌をきいたり、豐滿な裸體美をさらけ出してゐる夢幻的な華やかなキャバレーの舞臺面などを見てゐる時に、アラビヤの沙漠や人里の遠い曠野の落莫さなどを思ひ起す筈もなかつた。おかげで私達はもうすつかり鰐のことなどは全く念頭から忘れ去つた、のんきな朝夕を送りつ迎へつしてゐた。

そのうちに歐洲の旅も終つて、いよ〳〵マルセーユから歸りの船に乘りこんだ。ナポリでヴエスビアスに登つたのを歐洲の名殘にして、あとは永くて退屈な浪の上の旅が幾日も〳〵も續いた。夏も終りに近くて、朝も晝も夜も暑かつた、だが本場の熱帶地で訓練された私達には、もうその位の暑さは大して苦にもならなかつた。さうしてコロンボにつく頃には、三ケ月程前

にこゝを通つた時の思ひ出が誰れの心にもまざ〳〵と甦つて來てゐた。

或る朝、間島君の所へ電報が來た。

「鰐の肉がいよ〳〵用意してありますよ」

と間島君はニコ〳〵しながら云つた。私はカラチでの光景を思ひ出して一寸變な氣がした。鰐の味の話があちこちで初まり出した。

シンガポールへついた朝は薄ぐもりのむし暑い日だつた。今更またジョホールあたりへ車をとばして見た所で、面白くもなし、晝前はお互に思ひ〳〵に街をぶらついて、夕方から一つ所に集ることにした。

さすがに夕風が涼しく椰子の林を吹きぬけてゆく頃、私達七人のものは皆海岸べりの料亭の常盤に集つてゐた。

久しぶりの日本式の風呂に入つて、浴衣に着かへた一同は、すつかりのんびりして海の見える座敷の青疊の上にあぐらを掻いた。

卓の上には新午蒡の金ぷらやら酢のものやら、暫くお目にかゝらなかつた懐しいつまみものゝたぐひが並べてある。

「鰐の肉はまだ出ないぢやないか」

と卓の上を見廻してゐた誰彼も、頻りにウヰスキーをがぶ〳〵のんでゐる。少々酒でも飲んでからでなくてはと、誰れも同じやうなことを考へてゐるらしい。

二つ三つ料理が運ばれて、皆の酒がいゝ加減はづんだ頃を見計つて、女中がニコ〳〵笑ひ乍らいよ〳〵鰐の肉を運んできた。

最初に出てきたのは何と生々しい刺身だつた。皆妙な顔をして感心したやうに眺めてゐる。刺身の皿の上に綺麗に並べられたのを見ると、鶏のさゝ身と鯛の肉とをつきまぜたやうな、白い色をしてゐる。間島君の説明によると龜屋の親爺が苦心の結果、やつといゝのを探して手に入れたのださうで、長さ四尺程の鰐で、肉にして二十封度からあつたといふ。まだ殺したてだから決して腐敗なんかしてゐないといふ。

「仲々綺麗な色をしてゐるね」

「鳥のやうで一寸うまさうぢやないか」

など〻お互にほめ乍ら、珍らしさうに眺めてはゐるが、誰も第一に箸をつけやうとはしない。

「しかし大丈夫かな、當りはしないかな」

など〻誰れかゞ混ぜ返すと一寸尻込みする氣にもなる。とう〳〵義憤を感じたらしい主唱者の間島君が、いきなり勇敢に白い肉をはさみ上げて、ぱくりと食つた。

「どうだ、どんな味がする」

と皆して間島君の口許ばかり見てゐる。

「うん、仲々うまいよ」

と答へると、あとは騎虎の勢、酒の力も手傳つて、皆で箸をつけた。

私も一片頬ばつた。舌ざはりは蝦の生身を含んだやうであるが、柔かいやうに見えて、いくら嚙んでも嚙み切れない。不思議な肉である。さうしてもつとおかしな事には殆んどこれといふ味がない。眞綿を嚙むといふ形容はあるが、鰐の肉は正にそれである。臭くもなければ、甘味もなし、苦味も辛味もない。甚だ以てたよりない味のない味である。

皆してこれは何に似た味だらうと考へたが、適當なものはどうしても見當らない。要するに無味の味である。鰐の肉だといふので食ふ氣がないわけではなく、味のないまづさに閉口して三片と食ふものがない。

そのうちに今度はフライにした肉が出た。食つて見ると妙なもので、生の肉の時は一向とりとめのなかつたものが少し味が出てゐる。しかし勿論大した味ではないが、まあごくまづい蝦のフライ位には食へる。

「これなら結構食へるぢやないか、まあ蝦だね」

鰐を喰ふ

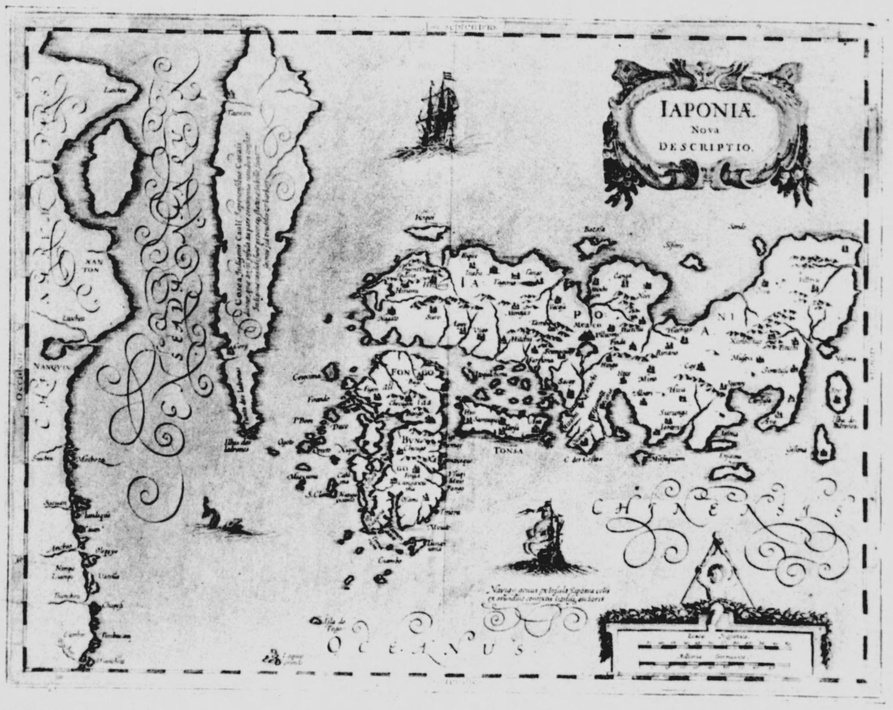
などゝ云ひながらも、他にもつとうまいものが並べられてゐては強ひて食ふ氣になるしろものではない。

結局騒ぎ散らした揚句に二十封度の肉の何程も平げずに大部分は殘してしまつた。

「これを一つ船へ土産に持つて行つて、明日の特別料理にして有志のものに振舞はふぢやないか」

と誰れかゞ云ひ出したのをいゝ潮にして、非常に博愛の心に富んだ一同は、鰐の肉はそのまゝまだ味つたことのない人の爲めに殘すことにして、あとはもう食ひなれた酒とさかなの陶醉境に入つて行つた。

三百年前の日本地圖



三百年前の日本地圖

I

私にとつて海外の旅の最も大きな樂しみの一つは古本漁りである。

嘗て住んだ都、訪ねた都でも、年月がたつと街の相貌がかなり變つてしまつてゐるのが常である。中でも商店街などは顧客を吸收する必要からでもあらう、建築にしても、裝飾にしても新らしい樣式を取入れたものが多くなつて、ぢきに街の顏をかへてしまふ。だが不思議なことにかうした變りゆく都會の中で、古本街だけはどこでも一向に變つてゐない。何年かぶりで久々の旅をして、街の變化に目を見はりながら、古本街に入ると、そこは昔ながらの古ぼけた店が並び、見覺えのある昔通りの店と店構へとを見出した時、見知らぬ宴會で古い友達の姿を見つけたやうな、懷しさと、しみ〴〵した安易な氣持になつてくるものである。巴里の河岸の古本屋も、ロンドンのチヤーリング、クロスの古本町も昔の通りで私に歲月のへだゝりを忘れさせてくれた。この意味からも、私には旅先きの古本漁りは悅しいものゝ一つであつた。

或日私はロンドンの大英博物館へ行つた歸りに、横町に外れて、以前行きつけた古本屋へ入つて見た。欲しいものは澤山あるが旅先きのことで肝心の財布が云ふことをきかない。その前の日も別の老鋪で私のすきなブロイゲルの素ばらしい豪華版の畫集と、アダム・スミスの富國

論の保存完全な初版本を見た。ブロイゲルはすぐに諦めたが、富國論はさうは行かなかつた。日本に何冊しかなくて、どことどこに珍藏されてゐるといふことまで一通り心得てゐるだけに、完全無類の綺麗な初版本だけに、どうにも欲しくてならなかつた。同行した石川欣一君などは思ひ切つて買へよと幾度も挑發するので、餘計にほしくはなつたものゝ、二百六十磅といふ、本の價値から見れば確かに安いにもかゝはらず、どうにも財布との相談がまとまりかねて、惜しいのを無理に諦めてしまつた。博物館前の古本屋にはそれ程に心ひかれる稀觀本もなかつたけれども、それでも根よく探してゐると、いろ〳〵なものがあつた。

こゝの店には古いエッチングや地圖が割合に澤山あつた。私が一枚々々めくつて見てゐると店の親爺は奥の方から何かもつてきて、これはどうです、珍らしいものだと思ひますがねと云つて見せた。それは大版一枚繪の日本の地圖だつた。西洋の古地圖と同じ形式を備へて海には帆船が浮いたり、怪魚が踴つたりしてゐる。色は無論刷つたあとで一々手でさしたものである。

かういふものゝ智識にかけては零に等しい私には、此地圖にどんな價値があるものか一向にわからない。ありふれたものなのか、珍らしいものなのかもわからない。本屋の親爺は、まづ一六三〇年から一六五〇年迄の間のものに違ひないといふ。さうするとざつと三百年前のもの

になる。さう、ざらにあるものでもなからうと思ひながら、その地圖を見てゐると、だん〳〵面白くなつてきた。九州と四國は中々正確に近い形でよく描けてゐるし、本州も近畿から西半分は大分良いが、關東、東北は簡單に片づけられて、小さなものになつてゐる。北海道などは影も無い。さうして最も奇妙なことには、對岸の支那と日本の間に、さなぎのやうな恰好をした朝鮮が、大きな島になつて海に圍まれてゐるのである。

私はわけはわからぬながら馬鹿に面白くなつて、一ギニーといふ値なら高いものでもないと買ふことにした。

その晩、ピカデリー、ホテルに歸つてから、私はその地圖を出して樂しみに調べて見た。大阪は無くてサカイがある。京都はメアコとしてある。無論ミヤコであらう。そのほか地名なども今から考へると面白いものが澤山書いてある。地圖の裏には日本島略記がついてゐて、それを讀むと、馬鹿々々しいやうな荒唐無稽なことが並べ立てゝあつて、私は讀みながら一人で吹き出してしまつた。

旅先きではどうにも仕方がない。日本へ歸つたらば一つこの地圖がどんなものなのだか調べて見やうと考へて、行李の奥に叮嚀にしまひこんだ。

一

永い旅も終つて日本に歸りつくと、すぐに忙しい日が待つてゐた。ロンドンの古本屋で買つた地圖のことなどは、いつか忘れてそれなりになつてしまつた。

そのうちに少し落付いたひまが出來てから、思ひ出したやうに地圖のことがふと頭に上つた久しぶりで取り出して見ると矢張り面白いものには違ひない。或日、社の和氣律次郎君にその話をして、地圖を見せると、研究家の同君は二三日のうちに、すつかり調べ上げて地圖の正體を明らかにしてくれた。それによると矢張り相當面白いものには違ひなかつた。

藤田元春氏の日本地理學史百六十一頁に、一五九五年版オルテリウス・テイセラの日本圖が寫眞版にして載つてゐる。これは歐洲で最初の日本圖ださうである。私の手に入れた日本圖はそつくりそれと同じ地圖であつた。たゞ寫眞版にある原圖は Japoniae Insulae Descriptio Ludoico Teisera auctore 1595 と題してあるが、私の持つてゐるのは、たゞ Japoniae nova Descriptio と題されたゞけで、年號はない。それに原板のは大海に船が三隻描いてあるのに私のには船が二隻に、怪魚が一匹泳いでゐる。朝鮮も一五九五年版はたゞ朝鮮としてあるのにこれは詳しく說明が入つてゐる。但しどちらも島になつてゐることは同じで藤田元春氏による

とこれは「大清一統輿圖の朝鮮が圖滿江と鴨綠江とひきつゞいて島にしてあるのと、類似の明版の天下圖の類を見た結果であつて、これもやはり支那の地理書に誤られた結果であらう」といふことである。

これで見ると私の持つて來た地圖は、歐洲で最初の日本圖卽ちオルテリウス、テイセラの一五九五年版の寫しをどこかで作つたものに違ひない。一六〇〇年から一六五〇年位の時代だといふ古本屋の考證も大體當つてゐるやうな氣がする。

地圖そのものについては無智識の私にはもとより、たゞ見て面白いだけで、それ以上の何の研究も出來る筈はないが、地圖の裏に刷つてある日本島大觀の文章は讀んで見てとても愉快である。これもどこから出た文獻かはわからない。しかし、どうやら蘭人 Arnoldus Montanus 著はす所の Atlas Japannensis に載せてあつたものを引用したのではなからうかと云ふことである。もしさうだとするとモンタヌスは、また Johannes Petrus Maffeus (Giovanni pietro Maffei) の日本に關する記錄から抄錄してゐるのである。マフユース（一五三五—一六〇三年）は伊太利の優秀な著作家で、一五六五年にエスイトルに歸依してローマ大學の教授になり雄辯學の講座を持つてゐた人である。數多い著作の中で一五八八年に著した Historiae Indicae は最も有名なものになつてゐる。モンタヌスはこのインド史の中から日本の分を抄錄し

てのせたわけである。そこでもし私の地圖の裏にある日本大觀がモンタヌスの引用なら結局はマフユースの孫引きといふことになつてゐる。もしさうでなくて直接にマフユースから抄錄したものであれば別であるが、モンタヌスからとつたものならば蘭文の原書 Atlas Japannensis は一六六九年卽ちわが寛文九年に出版されたもので英譯本が一六七〇年に出てゐる。もしこの英譯本と文句が同じでゝもあるなら地圖は無論それ以後の出版となつて一六七〇年以後となるが、そこまでは全くわからない。根よく詮索をしてマフユース本から調べてかゝればいゝのだらうが、どうも少々柄にない。

文獻の出所がいづれであるかは寧ろ第二である。私にとつては三百年前に外人の眼に映つたわが國の姿が面白い。いかにも荒唐無智な記述が讀んでゐておかしくなつてくるものである。

Ⅱ

地圖の裏面に記載してある日本紹介は次のやうなものである。

ヤパン島及びその附近に於ける小島嶼に關する記述

この島をマアキユス、ポオルスはジパングリと呼び、マグヌスの中にはクリシスと稱し、メルカトルによればオウレア、セルソネススとなつてゐる。然し今日は普通ヤポニア又はヤパンと呼ばれてゐる。ペトルス、マフエウスの證明するところに從ふと、三個の大島および幾つかの小島嶼から成つており、島と島とは狹い海によつて距てられてゐる。

最も主要な大島はヤパンと呼ばれ、五十三の公國又は王國に分れてゐて、その中ではメアコ(都)アマグンクム(山口?)テンゼが最大のものである。

第二の島はシモ(西國)と呼ばれて九つの王國より成つており、その中ではブングム(豐後)およびフイゼル(肥前)が大きい。

第三の島はシコウム(四國)で四つの王國又は領土より成つてゐる。

この島の全長は、ある人々の說では六百哩だといふが、その幅は全く長さに匹敵せず、或る所では僅か三十哩しかなく、最も廣い所でも九十哩である。そしてその面積に至つては全く不明である。それは北緯三十度乃至三十八度の北方に橫はつてゐる。それはノヴア、イスパニア(新西班牙)に相對して位置し、北方にはスキチア人、韃靼人その他の野蠻人の國があり、西方には支那があり、南は渺茫たる大洋がその岸を洗ふてゐる。なほ幾つかの未知の國々がそれに接してゐる。

この島の空氣は健康に適してゐるが、全土寒冷で降雪多く、豐饒ではない。

國人は九月に米を收穫する。又或る地方では五月に麥を刈る。この國の人は吾々のやうなパンを造らないで、ヘーステイ、プデイングに似た菓子を造つてゐる。住民達は地中から種々の鑛物を掘出し、それを以て海外諸國民を交易に來させる誘引としてゐる。マアクス、ポウルスヴエネツスの證言によれば、この國は非常に黃金に富む。王達の宮殿は恰も吾國の偉い人達の邸宅が、鉛や銅で蔽はれてゐるやうに、黃金の板金で蔽はれ、敷かれて居るさうである。

樹木は（果實のなるものも、その他のものも）吾國のものと大して變りはない。杉は至る所に生じて大木となり、寺院の柱や船の帆柱の材料になる。ヤパン人は羊、豚、鷄、家鴨等は勿論その他一切の不潔なものを家の中に置かない。牧場では各種の家畜を飼育して、馬も多く使役する。森林には鹿、兎、猪、狼その他いろ〳〵の野獸が棲息してゐる。

それから又、雉子、野鴨、河原鳩、雉鳩、野鷄等も多い。

ヤパン全土は（二十字省略）しかるに泰平日久しく、奢侈安逸のために勢力を失ひ、クビ（公方）の二大領主のために追はれてしまつた。そして又彼等の一人は更た對手を仆して政權を掌握したのである。

現在メアクム（都）および隣接の國々（それらの領土の普通テンゼと呼ばれてゐる）を領有

しておる領主は堅固な城砦および武器を有して、諸領主中の最大權力者と目せられてゐる。それといふのが（ヘーリン氏の說く通りに）テンゼ王領はメアク（都）の周圍にある五つの小領土を包含し、且つ五十の小王領を支配してゐるからである。かくしてテンゼの國王は『ヤポの君主』と自署してゐる、先頃暴君ノブナンガ（信長）がこれらの地方を手中に收めたが、その後フアシバ（羽柴）があとを繼いだ。彼はこの國の大領主の一人で、現在のクイコーサマ（太閤樣）の先祖であるが、前述の暴君を仆して、その子を或は殺し、或は追放してしまつた。彼はまた自己の政權を確立せんが爲めに、征服した領主達を一地方から他地方へと移したが、これは彼等をその支配權から引放して、未知の領民の間に屬せしめることによつて、彼等を何時迄も無力ならしめやうとするためで、實に賢明な仁慈の政策なのである。

今日全ヤポニアの領主として全國を統治する者はタイコイサマ（太閤樣）又はタイコー（太閤）と呼ばれてゐる。この領主の歲入額は不詳であるが、それが非常な巨額に上ることだけは想像に難くはない。何でもその領地から收穫するところの米穀の年貢だけでも黃金二百萬の收入があるといふことである。

首都はメアクム（都）である。これは堂々たる大都市で、以前は周圍二十一哩の廣さがあつたが、內亂のために甚しく縮少して三分の一大になつてしまつた。三人の最高長官がこゝに居

を占めてゐる。

それからオツサカイア（大阪？）といふ立派な有力な自由市がある。この都會は東洋屈指の富裕を稱せられてゐる。こゝには商人が雲集してゐるが、最も卑しいものでも三千磅の產を有しておると云はれ、その大なるものに至つては巨富を擁して居るのである。

ブングム（豐後）は非常に廣大な地域を占めて、その地方での首都である。そこには多くの領主が割據してゐる。

コヤ（高野）はボンヂ（坊主）又は僧侶の聖地であつて、彼等はそこをコンバダツシ（弘法大師）と呼んでゐる。そして苟も領王たるものはすべて此地に埋葬される習慣になつてゐて、萬一他の都市に葬られるやうな場合でも、少くとも一本の齒は必ずコヤに埋葬しなければならぬといふほど國民は此地を神聖視してゐるのである。

フイアノカンカはメアクム（都）をさる五十四哩の地にある。此地は暴君ノブナンガの時代に破壞されて、その後千五百九十六年、地震のために壞滅した。そして間もなく復興したが、その大部分は火災のために燒けてしまつた。

アマンガサキ（尼崎）はサカイ（堺）の對岸に住してゐる立派な町である。以上の他にも、ウオソキン、フナリウム、トサ等の立派な町があるが省略する。

便利な港も仲々多く、中にもオチナサマヌスを第一として、そこには絕えず帆檣が林してゐる。

高山峻峰にも富んでゐて、その中でも二つは特に有名である。一つは無名で絕えず焰々たる猛火を吐いており、その絕頂には惡魔が出現するが、その姿を見るためには、長い間の斷食と信心の苦行を必要とするのである。惡魔は赫燮たる雲間から姿を現はすさうである。他のものはフイゼノイアマ（富士ノ山）と呼ばれ、非常に高い山で、雲上に聳ゆる數哩と云はれてゐる。

華麗な建築物や、宮殿、寺院等についてはポウルス、ヴェネタスの記述に委ねやう。その宏壯さは今でも何等變りがないからである。現在國民を統治しておるタイコー、又はタイコサマはパレースを造つたが、それは如何にも奇異な驚嘆すべき建築物である。

そこには緞子、天鵞絨、黃金で刺繍を施した高價な帷や、壁掛が無數に掛け連らねてあつて用材はすべて最も高價なものからなつており、內部には純金が敷きつめられてゐる。彼はこのパレースの前に圓形劇場を建てた。そこで喜劇が演ぜられる。その一方の側から大分はなれて二個の高塔が屹立してゐる。その塔中には各々二三室がある。この國には地震が多いので家屋は大部分材木で造られてゐる。然し中には堅固で立派な石造もないではない。

この國の政府は（前に述べたやうに）三頭政治で、彼等は國の最高官吏として絕大の權勢威

力を有してゐる。第一はザゾと呼ばれる大司祭で、宗門を總攬する。第二はウオオと呼ばれ領土及び官職を支配する。第三はクバカマと呼ばれ講和及び戰爭に關する百般の事務を管掌する。

全國民は五つの階級に分たれてゐる。第一は政權を有するものでトノ（殿）と呼ばれてゐるが、この中に更に上下の階級があること、吾國の王、公、侯、伯、子、男の如くである。第二は神聖階級である。彼等は頭髮および鬚髯をきれいに剃落してゐて一生娶らない。そして多くの宗派がある。彼等は靈界にありながら中にはモルタの騎士と同樣に戰爭に參加するものもある。彼等はボンヂ（坊主）といふ總稱で呼ばれてゐる。第三は市民、邑民、紳士等である。第四は手工、製造等各種の職業に熟練せる人々であつて最後は農夫である。

惡事をする者は、何人たりとも、實に些細な罪若くは非行に對しても、追放、死刑に處せられる。時には不意に刀劍で芋刺しにされることもある。然し或る地方には殺人者や海賊を車にのせて、街路を曳き廻し、公衆に嘲弄させたあとで、市外で猶太人がやつたやうに、磔刑に處することもある。

彼等の宗教はといふと、非常なる偶像崇拜者であつて、迷信に溺れてゐる。彼等の宗門上の教導者は前にのべたやうにボンジ（坊主）である。

彼等はアミダ（阿彌陀）およびサカ（釋迦）と稱ふるものに對して最高の尊崇を捧げてゐる

それから又ホトケ（佛）といふものを信仰して、それによつて永生を希求してゐる。それらの他にもカミと名づける下等な神々を有してゐるが、これらは家内安全、家運隆昌、子孫繁榮等家庭の事を祈願するためである。

或る都會には大學の設けがある。パンヅムの大學の如きは、パリの大學よりも大きいと云はれてゐる。こゝでボンジ（坊主）は種々の儀禮を修め、且つ學問を勵むのである。ブングム（豐後）にもエスイト派の學校がある。そこでヤポン人はポルトガル語を學び、一方歐洲人はヤポン語を學んでゐる。

この國には印刷術も行はれてゐる。

國民は大がい勤勉で、機智に富んでゐるし、聰明で、從順で記憶力および理解力にすぐれてゐる。彼等は貧困を一向恥としない。そして喧騷、口論、偷盜、妄誓、博奕等を好まない。彼等は均齊のとれた背の高い體格を喜ぶ。彼等は身體は强壯で、六十歲になるまでも立派な軍人たることが出來る。そして髭を相當の長さに蓄へてゐるが、子供の前額の毛は小さな鐵鉗か鑷子で拔きとつてしまふのである。卑賤な者達や農夫等は、頭の髮の半分を、身分のある人士は頭髮の殆んど全部を刈つて、小さな一房だけあたまの所に殘して置く、そして他人の手を觸れさせることを恥辱としてゐる。

彼等の家の床は筵で蔽はれてゐる。それは蒲團のやうに造られてゐて、彼等はその上に横臥するが、枕にするものは石塊だけである。彼等は臀部の上に座つて、股で身を支へ、膝の上で食事をするのである。彼等は支那人のやうに清潔で、几帳面である。

肉類を食ふ時には、地に落さないやうに二本の小さな棒を使用するのである。それから又食事の前には手を洗はない。

食卓につく前には、はきものを脱ぎすてる。筵を汚さないためである。

下賤の者共、特に海岸の住民は草、米、魚等を常食にしてゐる。然し富んでゐる人達は美味美食の調理を心得てゐる。お客は料理毎に杉板で造つた清潔な小さな卓を與へられるが、それは地上四吋ほどの高さである（但し卓布やナプキンは用ゐない）彼等は糖菓をはじめとして饗宴の美味を食卓の上へ、ピラミッド型に積上げるが、それはすべて金箔が置かれてゐる。そしてその周圍には糸杉の葉や枝を飾るのである。彼等は又鳥禽を調理する前に、その嘴や脚に金箔を施すことがある。

ポルトガル人は此國で盛んに交易をしてゐる。此國は赤色を帶びて圓くて、大きい眞珠に富んでゐるからである。そして眞珠以外の寶石も多く産するので、豐富な黄金とゝもに、この國を富裕ならしめてゐるのである。

三百年の昔、この地圖によつて日本を想像し、この記事によつて未知の國の風光や人情をあこがれた者達のことを考へると、失笑を禁じ得ないものがあるではないか。

ダマスクス

I

シリアの沙漠を横斷して、夜通し走り續けたナイルンの自動車の中で、私達はウト〳〵としてはすぐに眠をさます半醒半眠の、不愉快な頭の重い夜をすごした。一層早く夜が明けてくれゝばと誰も考へてゐた。

やつと東の空が明るくなつた。沙漠の夜は明けるのも早い。地平線の一角がほの白くなつたと思ふまに、もうあたりは朝らしく遠くまで見通せる。不相變、木も草も何一つない一面の廣い平沙の世界である。自動車はいつまで走つても何の變化もない空間を全く機械的に動物のやうに走りつゞけてゐる。南極探險隊が見る限りの氷の原の明け暮れを、永遠の單調（エターナル モノトナス）だとその日記の中に書いたのを嘗て讀んだ記憶があるが、こゝもまた永遠の單調といふ感じのしみ〴〵とする世界である。

やがて陽はあか〳〵と沙漠一ぱいに照りかゞやき出した。狹い自動車の中にむし〳〵とした暑さが滿ちあふれた。

だるく退屈で、うすら眠い時間が單調にすぎて行つた。

午前七時。

ダマスクス

「山が見えるぞ」と誰れかゞいふ。單調にあきてゐた私達はむさぼるやうに窓から外をのぞいた。丘つゞきとでも云つてよいやうな、木も草もない赫白い山が、明るい白つぽい空を劃つて永く連つてゐる。レバノン、アンチレバノンの山脈なのであらう、見る目に何の面白味もない山であつても、平沙の單調の破られたゞけでも私達には喜びであり、慰めであつた。自動車は山の麓にそつて走る。

單調無聯であつたコースに目に見えて變化が現はれてきた。それまでは見るかぎり生物と云つては時たま羽のるり色をした鳥がとぶ位であつたものが、チラホラと人影も見え出した。ベドウイン、アラブと云はれる遊牧の民なのであらう、うすよごれた白衣を沙漠の風に吹きなびかせて、木の枝を切つた杖をつきながら、ものうげに私達の自動車を見送つてゐる。

やがてアンチレバノンの山麓に添つて青い森や林が見え出した。ダマスカスの町の白い建物が隱見し出した。僅か一晝夜ではあるが青いものから完全に絶縁されてゐた私達の目は、むさぼるやうに懷しくそのしみ通るやうな青さを、しみ〴〵と味つた。オアシスの魅力といふものが初めてわかつたやうな氣がした。

今まで道のない荒野を出鱈目に奔つてゐた車は、いつか一本の廣い道に入つて、左も右も一面の青い畑になつた。桑畑と葡萄畑が多い。女子供までが畑に出て働いてゐる。こゝでも灌漑

はかなりの困難だと見えて、畑の中に造つた大きな石井戸の廻りを駱駝が、ぐる〴〵と根よく廻つて汲上げをやらされてゐるのが見える。

果樹園と畑を通りぬけると並木道になつた。もうそこはダマスカスの町である。

I

ナイルンの沙漠横斷自動車の發着所で、二十七時間餘りの生を托した自動車から降り立つと埃だらけの服をはたき、泥まみれの荷物を下ろして別の自動車に分乘してオマイア・ホテルに向つた。

川には冷めたさうな水が流れ、青葉の茂つた並木には風が渡る。肥つたアラビヤ人が小さな驢馬に乘つて通る。回教の婦人達が黑づくめの服裝で、石造りの家並の日影を求めて通つてゆく。

恐らくダマスカスの第一印象は地中海側のベールートやトルコから汽車で入つてきたものとイラクから沙漠を越えて來た旅人とでは、まるで違つたものを與へられるに違ひない。前の道を選んだものは、風光の美くしい高原地帶の果てに、白茶けた臭い町を見出して眉をひそめるかも知れない。しかし落莫たる沙漠を越えてこゝについたものには町の姿よりも、青い樹々

に、水の流れに、オアシスとしての有難さをしみ〴〵と感じさせられるに違ひないのである。さうしてダマスカスの本當の面目はこのオアシスとしての、東西交通の要路としての地の利の中に見出されると云つても差支へないやうである。恐らくこゝは世界でも最古の都會であらう。バビロンよりも古い。傳說を遡れば舊約の昔創生記への回顧となる。ヘルモン山の雪と、パラダの流れとは、こゝに美くしい森と林を茂らせて、人に、駱駝に、小羊によき安住の地を與へた。エヂプトとメソポタミアの二つの文化はこゝで交錯し、攻むるにも、守るにも、平和の交通にも、こゝは重要な地點となつてゐたのである。その面影を忍ぶには私は沙漠を越えて來る方が遙かによくわかると思ふ。

オマイヤ・ホテルは賑やかな近代的な街中の橋際に立つた立派なホテルだつた。

殆んど全身埃だらけと云つてよい程に汚ごれ果てた私達は、何よりも早く一風呂あびたかつた。荷物の整理もそのまゝにして、私は汚たない服をぬぎすてた。

風呂の水が黃色くなつた程、すべての埃を洗ひ落して、初めてさつぱりした氣持になつて、柔らかい長椅子にのび〴〵と横はりながら、天國のやうな氣持で煙草をくゆらしてをると、突然瀏喨たるらつぱの響きがきこえてきた。

私の部屋は四階の、川に面した所にあつた。何だらうと思つて、窓からのぞいて見ると、川

をへだてた向ふに一段高く宏壯な建物を見せてをるフランスの總督官邸前の廣場に、一個中隊程の兵が整列して、銃劍がキラ〴〵と日に輝いて河岸の並木の間から見える。騎兵も大分澤山見える。私の部屋の窓からは相當の距離があるので、よくは見えないが官邸の大階段の前には總督が立つてゐるらしく、小さく背廣の人間が固つてゐるのが見える。

やがて又らつぱが鳴つた。百何十人かの兵の集團が、マスゲームのやうに動き出した。先登の騎兵の一隊が驅け出した。兵がそれに續いて行進を初めた。橋の所まで來ると、全隊がピタリと止まつた。右向けや左向けをやつた上に又勢よくらつぱを吹き立てゝ、市中へ堂々と行進して行つてしまつた。

あとで私は階下に下りた序に、シリア人で英語の達者なホテルの男に、さつきの軍隊行進は何だと聞いて見た。

「佛國の總督が、けふ旅から歸つて來たので、閲兵式をやつてゐるのです。そのあとであゝして軍隊に市中行進をさせて、デモンストレーションをやらせるのです。實は……」

とそこで聲をひそめて、

「きのふ總督がこゝへ歸着する途中で、シリア人にピストルで狙撃されたんです。尤も命中はしないで總督は無事だつたのですがね」

と云つてニヤリと皮肉な笑ひをもらした。

私は日本に居てあらかじめ知つてゐたシリアの現狀は、來て見れば矢張り事實とは大分違つてゐることを直覺した。

シリアは大戰まではトルコの一部だつた。大戰は終り、トルコは敗れて、彼等は當然民族自決の精神にもとづいて、獨立の曙を迎へることゝ思つてゐたのに、一九二〇年のサンレモの會議は委任統治權が佛蘭西に與へられて、國際聯盟は一九二二年にこれを承認してしまつた。元來シリアは古代フェニキアの地である。血の氣の多い、冒隱好きな、精悍無類な民族であるだけに、この取扱ひに滿足しやう筈はなかつた。新らしいトルコに合併を希望するドルース族とアラビヤ人の爲のアラビヤの民族的獨立を企つるものとの兩派が力を併せて一九二六年の反亂となりダマスクの市街戰ともなつた、その翌年にもまたダマスクを中心にして小さい反亂が起つたこともあるが、それ以來は表面平穩に治まつて今日にいたつてゐる。これについては別の意見をたてるものもある。一九二六年の反亂は、民族的の獨立運動ではあるが、一面から見れば經濟的の原因によつて促進されたものだとする意見である。卽ちこの年にはフラン貨の大下落が來たゝめに、フランに寄依するシリア貨の價格下落を生んで、經濟的にシリアに恐慌を來したので、それが直接に佛蘭西への恨みとなつて、ドルース族の乘ずる所となつたのだといふ

のである。從つてその後、フラン貨は安定し、シリアの經濟は依然として世界的農產物價格低落の爲めに衰微してはをるが、とにかく佛蘭西の委任統治となつたゝめに特に悲慘な情勢を齎すといふ現象がなくなつたのと、佛國自身の對シリアの警戒が嚴重になつたことゝの爲めに、現在ではもうすつかり治まつてしまつたといふのが私の豫め知つてゐたシリアの政情だつた。

しかし、こゝに來て見れば、現に總督暗殺のピストルが鳴つてゐるのである。見ると聞くとは大きな違ひといふ俗諺を、今更のやうに私はダマスク到着の第一日に、しみ〴〵と感じさせられたのであつた。

Ⅲ

街を歩るいて見ると、ダマスクはバクダツドと大體に於てよく似てゐる。文化的の色彩こそ幾分まさつては居るが、住んでゐる人や、バザーや風俗は、まことによく似てゐる。

回教千二百年の中心地であるだけに街はいたる所にモスクが立つてゐて二百五十を算すと云はれてゐる。中でも有名なサラデイン・モスクなどは言葉通りの大伽藍である。無氣味な回教徒がひざまづいて、何か教文を唱しながら、頻りに叩頭してをる有樣などは、回教そのものに何の智識も持合せてゐない私には、珍らしい以外の何ものでもないが、廣い〳〵床一面に敷き

つめた美事な絨氈の美くしさには目を見張らせられた。國々の回教徒が何れも財を傾けて競つて寄附したものださうで、色彩と云ひ、模様と云ひ、正に華麗な人工の美の極致である。

昔、ローマによつて建てられたのだといふ所謂ローマ古城址の門の、僅かに一角だけ殘されたほとりから、大きなバザー街に入る。

バクダツドのバザーよりも一層臭く、一層ごた〳〵の人混みのはげしい地域である。アラビヤン・ナイトの幻想はこゝに一歩踏みこめば誰れの頭にもすぐに浮び上がる。名物のダマスクの刄物を所せましと並べ立てた店の隣りには、キラ〳〵と光る寶石の店があり、美くしい絨氈をかけ連ねた店に隣りして、大きなせんべいを燒いて賣つてゐる。異臭と喧噪の渦卷く人ごみの中をもまれて、高いガラス張りの屋根の下のほの暗いトンネルを通つてゆくと、バザーの中途に大きな穀物倉に似た廣場があつた。昔は沙漠を越えるキヤラバンが、こゝで一夜の宿を駱駝と一所に求めたものださうである。

やつと市場を通りぬけると暑い陽がカツと照つて、すべての物皆が明るすぎる程明るく感じる。

案内者はふり返つて、市場の大きな屋根を指さした。

「ごらんなさい。あれが今から十年近く前に反亂が起つた時の形身ですよ」

見ると今まで氣はつかずに居たが、高い家屋にも柱にも無數に小銃彈のあとがあり〳〵と殘つて硝子張りの所などは、まだ丸く小さい彈の跡がプス〳〵とあいてゐた。

「この邊から二三町の所が一番戰鬪のはげしかつた所です。何しろ町の中心地ではあるし、回教のアラブ達が死物狂ひに攻擊するので、一時はどうして全く手がつけられない程物凄かつたのです。佛蘭西兵も小銃戰ではとても叶はなくつて、とう〳〵飛行隊が活動して、空から爆擊をやつて、やつとのことで鎭壓したのでした。佛蘭西ではドルース族の反亂運動と、宗教上の汎回教主義の運動とは別なものだと初めは思つてゐたのですが、この時の反亂で何もかも氣脈を通じてアンチ、フランスの革命運動となつてゐることに氣がついて、それ以來回教徒への監視も馬鹿に嚴重になつて來てゐるのです。しかし回教徒の信仰は、すばらしく强烈なものですから、力で抑へることなどは出來やしません。現在の大モスクだつて、もとは基督教の寺院だつたのをアラビヤ人が攻めて掠奪して、自分達のモスクに改造してしまつたものなんですからね」

と案内者は雄辯に、いろ〳〵とフランス對アラブの抗爭の話を續けた。私にはいづれも耳新らしい話ばかりだつた。

翌日の朝早く、私は商業會議所の會頭のアレフ・ハルブニ氏の私宅を訪問した。前の日に會

見を申込んだら、私宅へ來てくれないかといふことだつたので、其約に從つたのだつた。

會頭の邸宅は靜かな住宅街の一角にあつた。立派な石階を登つて案内を乞ふとすぐに廣い應接間に通された。金持だと見えて部屋も調度も立派であり、支那の古陶が硝子張りのケースの中に何百となく飾り立てゝあつた。

會頭はアラビヤ語しか出來ないさうで、通譯を兼ね、經濟事情の説明役をかねて、工業家であり銀行家であるアスフアーサラ會社主のカリル・サラ氏とシオフイ・フレーレ氏とが同席してゐた。直接に言葉が通じないで一々通譯して貰つて話をするのは、誠に變なものである。會頭はもう老人で商賣は上手なのであらうが、私のやうな經濟を研究しやういふやうなものとはどうも話がしつくりゆかない所が多い。

私は煙草を吸はふとして、ポケツトからシガレツト・ケースを出した。すると老會頭は急に何かわけのわからぬ激しい聲を出して私のケースを抑へるやうにした。言葉のわからない不自由さから、私は大方、こゝで煙草を吸つてはいけないといふわけなのだらうと考へて、すつかり恐縮してしまつた。ひよつとしたら回教徒の信仰から何か六つかしいことがあるのかも知れない。これはとんだことをしたと後悔したほど、老會頭の語句の調子は、はげしくこちらへ響いた。所が、さうして私のシガレツト・ケースを抑へておいて會頭はそばの棚からすばらしい

エジプトの葉巻を出して、一本とれとすゝめた。實際どうも言葉が通じない位困つたことはない。

奥から老會頭の夫人が出てきてコーヒーをすゝめた。すばらしく香氣の高い、うまいコーヒーだつた。ジヤバで飲ませる、コーヒーのエキスのやうな濃い液を、乳でうすめて用ひるのも決してわるい味ではない。しかしシリア、イラクのコーヒーには別趣の味がある。土民の嗜好も恐らくは相當に高くなつてゐるのであらう。バクダツドもダマスクスでも街の名物の一つとしてコーヒーの流し賣がゐる。妙な嘴のついた箱のやうな袋のやうなものを肩から吊して、片手に二つの小さな茶碗を持つて、それをカチ〳〵と巧みに打ち合せて音を立てながら街から街を歩るき廻つてゐる。客がつくとその小さな茶碗に、嘴の先きから手品遣ひのやうに器用な手さばきで濃いコーヒーの液を注ぎ出してすゝめる。客はその小さな茶碗をもつて天を仰ぐやうに最後の粕までもうまさうに飲み干してゐる。流石に私もダマスクスの往來でコーヒーの立飲みを試る氣にもならなかつたのであるが、カチ〳〵と茶碗を打合はせて鳴らす音には、いつも妙な魅力を感じてゐたものであつた。そのコーヒーの精選されたものが會頭の應接間で出てきたのである。

夫人が私達の卓の上に置いたのを見ると、小型の茶碗が日本のやうに高い茶托の上にのつて

ゐる。手にとらうとするとすばらしく熱い。それで茶托がついてゐるのであらう。一口のむと強烈な香がぷんと鼻に來た、味はトロリとしてコーヒーの玉露だなと思はせた。たゞ小さな茶碗の中の半分はコーヒーの粕がそのまゝ入つておどんでゐる。正味の飲む所は半分しかない。

私が感心してゐるのを見て、フレーレ氏がこゝでのコーヒーの入れ方を說明してくれた。小さい茶碗にコーヒーを入れて、その茶碗で煮る。沸騰するとさまして、又火にかける。さうして本當にいゝ味の出た所で熱いまゝを客にすゝめるのだといふ。手數がかゝつてゐるだけに香も味も申分のないものとなるらしいのである。

私はこのうまいコーヒーをのみ、匂ひの高いエヂプト煙草をくゆらしながら、ポツリ〳〵と話をすゝめた。

シリアは生糸の國である。しかし元來生糸工業と云つても、大工場組織らしいものは四つか五つに止まつて大部分は手工業の範圍を出ず、近年は人絹に押されて全く生色がないといふ話であつた。フレーレ氏が、これが見本だと云つて見せた絹織物は全く幼稚なものとしか見えなかつた。

會頭は私の質問に對しては肝心の所へくると一向にはき〳〵した要領を得た答へを與へてくれない。さうして片貿易を何とかして貫ひたいものだといふことばかり主張した。日本から來

て、何かシリアの物產で買つて貰へるものもありさうなものだ。羊毛もある、穀類も豐富にある。杏などは質がいゝ、羊や牛の革類はいくらでも輸出力があるのだからと頻りに說くのであつた。

私はとう〳〵しまひに聞いて見た。

「片貿易は出來るだけ改めて、日本から賣るだけでなしに、何とかして、あなたの方からも買ひたいといふのが私達皆の念願なのです。だが一體かうした片貿易の整調について、あなたの國ではどんな政策をとらうとして居られるのですか」

私の云つたことを通譯してフレーレ氏がアラビヤ語で何かいふと、白髮の老會頭の眉に六つかしい色が浮んだ。暫く默つてゐた末に、何か早口で簡單にしやべりながら、複雜な表情を含んだ微苦笑をして見せた。

フレーレ氏からまたおゝむ返しの返事をきくと、會頭はかう云つたのだつた。

「あなた方は、これから佛蘭西へ行かれるのでせう。通商政策のことはどうぞパリで聞いて下さい。こゝでは何もわかりません。それがマンデートの悲哀です」

IV

その夜私は、たまつてゐた日記を整理して、ダマスクスに來てからの印象と見聞を頭の中でくりかへしながら、更けるまでホテルの一室でペンをとつてゐた。

室内は煙草の煙りが立こめて、私はすつかり疲れた。窓をあけて外氣に大きな息をはいた。目を落せば、ダマスクスは今靜かに眠つてゐる。何といふ靜寂な深い眺めなのであらう。どこかに月があると見えて薄明に似た光りが街全體の上に穩やかにふりそゝいでゐる。モスクの塔はいたる所にお伽話の國のやうな影を落して、白つぽい石造りの民家は、海の底のやうな蒼みがゝつた靜けさの中に横たはつてゐる。空はほのかに青く煙つて聖者の瞳のやうに奥深い感を與へてゐる。

私は思はずまた大きな息を外氣に向つてはいた。興亡四千年、すべて是れ一夢、嘗てはダビデの子等が、同じこの月を仰いで徘徊したであらう此都に、今は異邦人の支配の下に、ムハメダンの男、女が眠つてゐる。千年の後二千年の後、こゝにはまたどんな風光が現出されることであらう。人は變るが自然のみは千古同じ姿を止める。平凡なことながら感慨正に無量である。

私はいつまでも冷え〴〵とした夜更けの外氣をすつて、窓際に立つくしてゐた。

密輸入物語

I

X君。

惡の華はいくら枯らさうとしても、根滅することなどは到底出來ないものらしい。一方を抑へつければ、他の方がふくれてくる。ゴム玉を對手にするやうな頼りないものが罪惡の世相だ公娼を廢止すれば私娼がふえるし、光が强ければ强い程、影も濃くなる。どうも世の中を見渡すと、すべてさういふものであるらしい。

南船北馬、いろ〳〵の國を見て廻つて、經濟の世界にも、これと同じことが矢張り行はれてゐるのをしみ〴〵と思はせられた。

君も知つてゐる通りに、こゝ數年來の世界經濟の思潮は、國際主義から國家主義へと、どの國もまことに鮮やかな轉向を見せてきてゐる。ブロック經濟の結成と云ひ、クオーター制だの、求償主義だのと、いろ〳〵の輸入制限法が次ぎ〳〵に發明されてゆくのも、やる方から云はれば財政整調の方策だとか、自國産業の保護だとか、國内景氣の恢復策だとか、それ〴〵の理窟はあるに違ひない。しかし結果から見れば要するに排他的政策の瀰漫に他ならないのだ。廣い世界も近頃はだん〳〵狹くなつてゆきつゝあるのだ。

これも大勢だと云つてしまへばそれまでゝある。しかしこの大勢は實行上には大分無理が伴ふ。國家經濟といふ大きな立場から考へる政治家は關税をつぎ〳〵に高くして外國品の輸入を防壓しやうとも考へるだらう。また外國品の輸入防壓によつて利益をうける產業資本家は喜んでこの政策を迎へもするだらう。しかし一面にはこの政策を喜ばぬものや、その裏をかゝうとするものが非常に多いことも忘れてはならない。所詮この世界的の不況時代に處して、輸出業者は少しでも餘計に輸出したいのが念願だ。輸入業者は少しでも安いものがあれば、それを取扱つて、購買力の缺乏した大衆の需要に應じ易いものを買ひ求めたいのが念願だ。だがこの念願は統制經濟の强壓下に、排外通商政策の障壁にぶつかつて思ふやうにはならなくなつてゐる。また別の方面から云へば、國家が關税加重その他の輸入制限法によつて外國から入つてくるものゝ値を高くすればする程、もし安いものを輸入出來れば儲けは多くなつてくる。これは商賣人にとつては何よりも大きな魅力であるに違ひない。こんな事情から、こゝに惡の華が咲く。密輸入がそれなのだ。

恐らく近年位、世界を通じて密輸入貿易の盛んな時代はないだらうとさへ思ふ。光が强ければ强い程、影も濃いと前に言つたが、ます〳〵激化する關税競爭、輸入制限競爭に連れて、密輸入もいよ〳〵深刻になつてゆきつゝあることは間違ひはない。惡の華は相當毒々しい色をし

てゐる。そつちよくに云へば私は近年の各國の貿易統計なるものにだん〳〵信用を置かない程度が大きくなつて來てゐる。正確無類な貿易統計などは、いつの時代でもありやしないなどゝ云つてくれては困る。そんな解り切つた貿易上の誤差などのことではないのだ。もつと大きな開きが統計と實際の上に横はつてゐると考へる筋が澤山にあるからなのである。

實證を擧げれば實際限りなくある。私は各國の港々でどれ程密輸入の隱れた話をきかされたかわからない。しまひにはそれにすつかり興味をもつて進んで調べ出すやうになつて來た。これから君に、その密輸入の物語を書き送らうと思ふ。だが一應前以て斷つておかなければならぬのは、餘りにも生々しい眞實の姿は書けもせぬし、書きたくもない。日本の貿易について障害となるやうなことは書かないことにする。從つてまた地名その他を明記出來ないものも少なくないから、その點は大目に見て置いて貰ひたいと思ふ。

I

政府の輸入制限政策が八釜しくなつてからどこの國の税關も旅行者にすら目を光らすやうになつて來た。英國などは昔は實に寛大なものだつたが近頃はどうして手荷物の檢査すら實に嚴重を極めてゐる。

それについて近頃のエピソードとして奇拔なものが二つばかりあるから、まづその話を書かう。英佛海峽の連絡船は毎日頻繁な往復だけに、目こぼしがあつて何を密輸入されても困るとあつて旅客の手荷物を、やけに嚴格に調べる。餘り嚴格なので或時、二人の英人が佛蘭西から葉卷が千本、スマッグル出來るか出來ないかで賭をした。一人はやつて見せるといふ一人はとても此頃のやうに嚴重に調べられては千本は愚か百本も六つかしからうといふ。そこで賭になつた。二人の男は仲よく佛蘭西から海峽の連絡船に乘りこんだ。一人の男は小さなスートケースを一つだけ持つて、その中には別に隱しもせずに千本の葉卷を無雜作に投げこんであつた。大膽不敵な話である。開けて見られたら、それつきり、いや應なしに發見されて課稅されるにきまつてゐる。賭の對手にはこの男が、何の成算があつてこんな大膽なことをしてゐるのだか見當もつかなかつた。

瀟洒な形をした連絡船はすぐ動き出して、海峽の白浪を蹴つて進んで行つた。その男はすぐにバーへ飛込んでウキスキーを命じた。連絡船にあるウキスキーは仲々上等だ。その男はとう〳〵船が英國岸につくまで、おみこしを据えて、ウキスキーを完全に一本あけてしまつた。勿論足許も定まらぬ程、フラ〳〵に醉つぱらつて、だらしがなくなつたのは申すまでもない。船がつくと二人は上陸して稅關に入つた。友人の男はもうすつかり虎になつてゐる男を持ちあつ

かつてすつかり閉口してしまつた。稅關へは列を作つて一人一人、札を貰つて檢査所へゆくのだが檢査所は長い卓があつて、旅客はその上に鞄をのせて檢査官に中を明けて見せることになつてゐる。

順番が來るとその男は、よろ〳〵と卓に近づいてどさりとスートケースを投げ出すと、ろれつの廻らない醉態で、檢査官君、僕あこの鞄の中に、葉卷を千本入れてあるんだ。サー一つ檢査して稅をかけてくれたまへとやつたものだ。正に正直に鞄の內容を申告したことになる。

所が檢査官は臭い息をはきかけて、フラ〳〵しながら、頻りにわめき散らしてゐる男を、にが〳〵しさうに見てゐたが、怒つたやうな調子で、こんな所で冗談を云つてゐては困りますねさあ早く向ふへ行きなさいとスートケースは明けもせずに、白墨でオー・ケーと書いて押し返した。

これでとう〳〵その男は、首尾よく葉卷を千本密輸入した上に、賭金をせしめたといふことだ。

またこんな話もある。矢張り英佛海峽の話で、パリーからやつて來た餘り英語の出來ないある日本人が、英國の稅關で型の如く調べられた。

「君はスピリットは持つてゐるかね」

と税關吏が聞いた。スピリットと云へば魂のことだらう。おれは日本人だ、立派な大和魂を持つてゐるぞ、小癪な質問だとその人は考へた。そこで昂然として答へた。

「勿論、僕は持つてゐる」

税關吏はすぐに反問した。

「では何處に持つてゐるのだ」

どこもこゝもあるものか、魂は丹田にあると考へたその人は、こゝにあると臍の所を叩いて見せた。

「あゝそこか、飲んでしまつた酒なら、税は拂はなくともいゝ」

と税關吏は笑ひ出した。

申し分のない落語見たいな話だが實話ださうだ。

こんなことを書いてゐては切りがないから、いよ／＼報告に入るが、實際近年の各國の税關の八釜しさは驚くばかりだ。尤もいくら八釜しいと云つても、そこは何事にも袖の下のきく外國のことだから、裏面は裏面でまた別の消光もあらうけれども、兎に角、檢査が昔日とは段違ひに嚴重になつたことは事實である。しかも税關檢査が嚴重になればなる程密輸入の方も巧妙にもなれば、大膽にもなつてくる。

支那が密輸入の王國であることは、その道のものならば誰れでも知つてゐる。餘り詳しく書くわけにも行かないが、密輸入を企てるものも惡るいには違ひないが、密輸入を奬勵するやうな腐敗した支那の官吏の方が一層罪が深いとも云へる。汕頭には關税の五割の口錢で何でも引受ける密輸入會社があるさうだ。こんな會社組織は方々にある。ひどいのになると〇〇主席の兄なる人が密輸入監視の取締をしておつて、數隻の速い船をもつて常住に海上取締の任に當つてゐるが、一皮はげばその取締の總帥が、とりも直さず密輸會社の頭梁だと云ふにいたつては、呆れざるを得ないではないか。密輸のコンミッションで土地の官吏の俸給を支拂つてゐる所さへあると聞く。かうなつては眞面目に密輸など論ずるのは馬鹿々々しくもならう。

滿洲にも隨分密輸は盛んに行はれてゐたらしい。私は大連で、奉天でいろ／＼な話を澤山きかされた。今度は滿洲國の關税改正で日本酒は無税になつたやうであるが、密輸を無くすのには無税にするのが一番効果があるとも云へる。無税なら密輸のありやうはないからだ。夜の暗が深くなると豆滿江の水の上に酒樽がブカ／＼と浮く。向ふ岸から、滿洲國側の岸に流れついて上がりさへしたら、それでいゝわけだから、いくら監視しても根絶は出來さうもない。見張る方にはすきはあつても、惡事をする方にはすきはないからだ。一年に滿洲國の日本料理屋がつかふ清酒は僅かに二十樽だとかいふ統計になつてゐるとか、そんなに少いことがあるものか

といふのは、密輸の酒がどんなに多かつたかを物語るものに他ならない。今度無税にすれば、恐らくは川の上を酒樽が夜中浮いて流れる光景などは見られなくなつてしまつたに違ひない。

朝鮮の女達が川に架した橋を渡つて春の日をのどかさうにブラ〳〵歩るいて滿洲國領に入つてくる。いくら調べても決して怪しいものは持つてゐない。本當に持つてゐないのだ。たゞ彼女等は皆、眞新らしい春の襟卷をして眞新らしいパラソルをさしてゐるばかりだ。これではどうにも手がつけられない。所がかうした女達の散歩が一週間もつゞくと、百本位のパラソルと襟卷がちやんと無税で輸入されてしまつてゐる。女達は日當を貰つて新らしいパラソルと襟卷を一つゞゝ身につけて向ふへ渡つて、歸りにはそれを置いて來てゐるのだ。全く手がつけられない。

阿片は量が少くて金目になるから、いつでも密輸入の好餌になる。反物の中へ巧みに卷きこんで送つたこともある。これが發見されて、もうまくゆかなくなると、生フキルムの中へ入れる手を考へ出す。生フキルムは明けて光りを入れゝば廢物になつてしまふので滅多に中を見られないことを、ちやんと承知の上での惡計だ。これがばれると今度は電池の中へ仕込む。あとから〳〵と惡智慧はいくらでも進んでゆくのだから全く油斷は出來ない。古い手で來る密輸ならどうにでも防げやうが、奇拔な新規の工夫をこらされるのでは、どうしても暫くはごまか

される度合が多くなる。いたし方のない事だ。

阿片と必敵して、かさが少くて金目になる密輸の好餌に近頃は金が出來た。各國の金輸出の禁止以來、さうして金地金の値上の結果、これを密輸すれば、大分ボロイ儲けになつて來た。そこで金買上値の違ふ國と國との間、或は金買上値と市場價格との開きの大きな國と國との間に、盛んに金地金のひそかなる移動が初まつてゐる。一時は內地から臺灣へ移出されてゐた金地金が、臺灣で消費されるのではなくて、ジヤンクにのせられて海の外へ出て行つてしまつた量も相當に多い。初めのうちは金の臺灣移出の數量が增加しだしても、金裝飾の好きな島人用だらう位に考へてゐたさうであるが、眞相がわかつてからは嚴重な取締りをして、これを食止めてしまつた。

近頃はまた朝鮮から滿洲への金地金の密輸も相當のものだ。朝鮮の產金が有望なのはわかつてゐるが、これが密輸出されるのでは何もならない。何でも最初は林檎の中へ仕こんで送り出したり、ひどいのになると婦人が自分の身體を利用して持出したりするものも相當あつたといふ。こうなつてはビシ〳〵取締らなければ際限がなくなるので、近頃は嚴重な監視のもとにこれを防壓するやうになつてゐる。

手近い例をあげても密輸入物語は際限がなく材料がある。しかし私はかやうな手近い例より

もいはゆる新市場と云はれる方面や、少し遠い所の實例についてこれから書いて見たいと思ふ。

Ⅲ

一體密輸入といふ觀念は、日本のやうに四面海に圍まれて、港を通じて貨物を入れるより道はなく、しかも國土が狹くて、稅關吏が嚴正で不正などは藥にしたくもない國柄で考へるのと國境が陸つゞきで廣漠たるものであり、稅關吏はいゝ加減な人間ばかり多い國とでは、まるで考へ方を違へなければならないやうだ。

陸つゞきの國境での檢査監督は、船からの陸上貨物のやうに完全には行かない。ドイツのやうな隨分嚴重な監督の行き屆いてゐる國でも、手ぬかりが多いのだから他は押して知るべしだ。近年のドイツが外人に對して特にレジスター、マークを與へておるのは誰れも知つて居る通りだが、これが普通のマークとは爲替率に於てすばらしい開きがある。私が行つた時には六割から違つてゐた。これは濡手で粟をつかまふとするものにとつては、たまらない誘惑であることは疑ひもない。ドイツの國内からマークを持出すことは無論禁ぜられてゐる。だが假りにドイツからレヂスター、マークを密かに持出して國外で外貨に換へるとすれば默つてゐて極端な場合には六割も儲るのであるから、これはやりたくなるだらう。又實際危險を犯してレジス

ター、マークの國外逃避を企てるものが絶えない。陸つゞきに國境を突破すればいゝのだからいろ〳〵の手を考へる。

國境では自動車の中から、疑はしければ身體檢査までもやつて、マークの持出しを監督してゐる。だが最近どうしても巨額なマークが流れ出てゆく形勢があるので、稅關吏はすつかり神經をとがらしてしまつた。やつとのことで密輸出の嫌疑の濃い一人の男に目をつけたが、仲々尻尾をつかませない。その男は自動車で國境を越えてゆくのだが、車内隈なく調べ、身體も全部調べて見るが、どこにもマークの巨額の札束などは持つてゐない。それでゐてそいつが頻煩に國境を越える度びにマークは確かに持出されてしまつてゐるらしい。ドイツの官憲が散々苦勞した結果、最後にやつとつきつめたトリツクは何だつたかといふと、自動車の四つのタイヤの中にぎつしりと札束を入れて奔らせてゐたのださうである。何でもその男は囚へられて極刑に處せられたとかいふことだ。かういふことは船でやつてくる旅客では一寸やれないことだ。大陸つゞきの國境なればこその話である。

そこで同じ陸つゞきであつても歐洲大陸のやうな割合に狹い地域で、しかも監督機關が備はつてゐる所はまだいゝ、これが一歩進んでインドであるとか、小アジアであるとか、近東、中東、アフリカ方面、エヂプト地方などのやうに、要するに廣漠たる沙漠のやうな場所では、國

境警備と云つた所で不十分きはまるものであるし、どこからでも入り込まふと思ひさへしたらわけなく入れる。こゝで密輸入が盛んに行はれるのは、地の利から云つて當然の現象だとも云へるのである。

インドの地續きに佛領の或る自由港がある。自由港であるからいくらでも勝手に貨物は入つてくるが、それが一歩陸つゞきにインドへ入れば、少くも重い關税分だけは儲かる勘定になつて、巨利がしめられる。そこでこゝを根城にして盛んに密輸入が企てられた、その國境税關にはこれまで英國の官吏が一人ゐて監督してゐたのださうであるが密輸入者が多くなつてからは迚も手が廻らなくなつた。最初はオートバイを一臺もつて密輸入者を見つけると、それで追廻してゐたさうであるが、一人を追廻して國境が留守になると、そのすきに、いくらでも別の者が入りこむ、どうにもやり切れなくなつて急に税關吏を五六人に增加して、皆してオートバイで大活動をやつて見たが、それでもまだ防ぎ切れない。前にも云つたやうに廣漠たる大陸のことだ。鐵條網でも張廻して置かない限りはどこからでも、もぐり込んでしまふ。

とう〳〵萬策つきて英國から賴みこんで、自由港ではあるが、密輸防止の爲めに、特に二割の關税を設置して貰ふことにした。こゝで關税をかけて置いて貰へば、密輸利益はそれだけ差引かれるからしなくなるといふわけなのである。ところが實際はどうかと云ふと、密輸のおか

げで佛蘭西は利益をうけてゐる。港は盛んになつて來てゐるし、こゝの官吏などは密輸品に對しては一割位のコンミツションを取つて大目に見てゐるわけなので、立派な家を建てゝ、贅澤な生活をしてゐるといふ仕末である。密輸が無くなつては困るのである。そこで英國からの申出によつて仕方なしに二割の關税はかけるやうにしたものゝ、裏面からはその關税はあとで割戻すことにしてゐるとかいふことである。これでは何もならないわけで、依然として密輸の根だやしは夢となつてゐるらしいのである。

インドでいつも問題になるのは王領の國々からの密輸である。何しろ王領は數から云へば四百程あつて、大きなのになると朝鮮位の面積を持つたものもあるし、小さなのは國の周圍僅かに十九哩と云つたやうな、玩具のやうな國もある。これらの王領は必しも英國の云ふ通りにはならず、關税政策などは、オツタワ協定も何もない、勝手な低率を課しておる所も多いので、自然の勢として、こゝから貨物を輸入して、それをひそかにインドの内地へ送りこむといふ手段が考へられてくるわけである。

ある海岸線をもつた王領の一つなどは仲々面白い。人口も五十萬以上あるし、面積も七千平方哩といふから相當なものであるが、こゝの關税は實に安く、繫船料も、倉庫賃も、鐵道運賃も眞に低廉なので、各國から盛んに貨物が入る。とてもその小さな王國では消費出來る筈のな

い大量のものがドシ〳〵入つてくる。ではその貨物はどこへ行くかと云へば、ラクダの背中にのせて奥地へどし〳〵密輸入されてゆくわけである。國境は八十哩に亘る一面の沙漠で、雨季になると所々池になつて舟がかよふ、乾燥期にはすべてが通路であるから、どこからでも平氣に奥地へ入つて行つてしまふ。眞にどうも、どう防ぎやうもない密輸入の好條件を備へた國である。

こゝの王様は恐ろしく西洋風が嫌いで、自動車などは國内にたつた二臺しかなく英國人でも何でもこゝの國へ來ては西洋風の家を建てゝ住むことは嚴禁されてゐるのだといふから徹底してゐる。何でも密輸貨物が各國から盛んに入つてくる爲めに、この王國の關税收入はすばらしいものがあつて、一年に百萬ルーブル以上にも達するやうになつたので、王様はすつかり悦に入つてゐるとかいふことである。

インドへは、かうした王領からの密輸ばかりでなしに、近隣の國々からも相當のものが流れ込んできてゐる。どうもこれは地理的に見て止むを得ないことであるらしい。私の調べたものだけでも可成り面白い材料もあるが、それを一々報告するわけにもゆかない。當り障りのない所をもう少し書いて見ると、細まかい細工をして、たえまなく密輸入されてゐるものは阿片である。あるクラウン、コロニーの國から海を渡つてインドへ阿片を密輸出してゐる土人達は、

小さな舟を用ひる。舟の中は港で無論全部調べられるが、無論何もない。夜に入つてから土人は舟の底を探る。水中に入つてゐる船腹の所から細い糸が一本水の中へ垂れ下つてゐて、それを引上げると先きに罐に密封した阿片がついてゐるといふわけである。つまり彼等は水中を糸で引きづつて阿片を運んでくるのである。これでは一寸發見は六つかしい。

棉花の中にうまく入れてくるのもある。つまり握り飯の中に梅干があるやうに、奥の奥へ入れてるので何千何百といふ棉花の梱の中の、特に目印しをした一つか二つの、奥の方にかくしてくるのではこれもまた一寸發見は六つかしからう。ペルシヤは阿片の産地だ。こゝからどれ程のものがひそかに各地に運び出されるものか、徹底的に調査でもしたら、驚くべき事實が澤山あるのではないかとも思ふ。

IV

ペルシヤ、今日ではイランと改稱してしまつたが、こゝの密輸入は大分大がゝりである。何しろ貿易を國家が獨占してしまつた國で、しかも輸出が一切の先決問題で、輸出證明書が卽ち輸入許可證と申すわけであり、輸入許可は地理的關係上ソ聯邦がライオン、シェーアを獲得して、砂糖や燐寸などは、ソ聯邦以外には輸入禁止といふのであるから、いやでも應でも密輸と

いふことになつてくる。

それには又イランの地理關係が頗る密輸に都合よく出來てゐる。イランの海岸線五百哩程はペルシヤ灣を挾んでアラビヤの沿岸と相對しておるが、アラビヤ人は由來、生命知らずの猛者が多い。アラビヤ側に荷揚げしておいたものを一葉の扁舟に棹して對岸のイランの岸につけるのは五六時間あれば容易なことである。しかもイラン沿岸の大部分は沙漠地帶だ。どこへ揚げたつて見付かりつこはない。そこで近年はアラビヤ側に密輸の爲めの港などが發展し出して、ギバイとかコエートとかいふのはかなり有名になつてゐる。何しろ是等の港は近年までは貧しい漁村にすぎなかつたものが、一躍して人口三萬とか稱しておるから偉らいものである。砂糖などは一夜にして二三千噸づゝを消化してゆくときいては、正に驚くべき闇の華である。

イランの政府だとて決して之れを見逃しておるわけではない。密輸の取締は相當嚴重であるのだ。しかし何分にも廣漠たる沙漠地帶をひかへた五百哩の長い沿岸である。最初は帆船二十隻から成る監視船を配しておつたさうであるが、とてもこれでは取締の出來やう筈もなく、その上に對手の密輸入者達が精奸無類なアラビア人と來てゐるので、月給で生命を棒にふる氣などはない監視役人などは、よしんば見付けても齒は立たない。

そこで今度はイラン政府は、伊太利から二百萬金ドルを投じて、小さな軍艦を六隻買つて密

輸取締をさせてゐる。中の二隻は九百五十噸備砲四インチ砲二門、別に高射砲を備へ、あとの四隻は四百五十噸、三インチ砲二門をもつてゐるのださうだが、全部の乘組員で三百人だといふから、何れにしても玩具みたいなものである。しかしいくら小さなものでも軍艦は軍艦で、大砲といふものを持つてゐる。うつかりすれば沈められてしまふので、密輸船も大分恐れをなしてゐるさうだが、完全な密輸防止などは無論のこと出來はしないでゐる。

エヂプト方面にも密輸はなか〳〵盛んなものがあるらしい。こゝもインドやイランと同じやうに落莫たる大陸つゞきである上に關稅が隣接國と違つて高いので、矢張り密輸の好市場と目されるのは止むを得ぬものであるらしい。こゝでは駱駝の背中を借りて、沙漠を通りぬけて密輸品が入つてくる。ある近くの町には裸ん坊の土人ばかり住んでゐる所に、彼等には全く用のない相當の雜貨類が、一年分も蓄積されてゐるといふ話である。やがて機を見て駱駝の背中で流れ出さうとする待機密輸貨物に相違ないのである。

X君。まだ書けば密輸入物語はいくらでも材料がある。しかしこの位書けばもう現在の世界各市場にいかに密輸が旺盛をきはめてをるかの一班だけは十二分に認められることだらうと思ふ。

一體何時になつたらば、こんな傾向が減退する日を迎へらるゝのであらうか。私にはどうも

世界經濟の大勢が、輸入防壓をお互に强めれば强める程、裏からの貨物の移動がますゝはげしくなつて行くものだと信ぜざるを得ないのだ。

窮極を想ふ

I

アンチ・レバノンの高原をゆるやかに奔りつゞける汽車の旅は、今度の旅の中では最も美くしく、最も詩趣にとんだものゝ一つであつた。

六月も末の沙漠は暑い盛りであるのに、四千二百尺の高原地帶は初秋のやうに冷えびえとしてゐた。一年の中で季節としては秋が一番好きな私は襟筋にひいやりと觸れてゆく秋の感觸を樂しみながら、靜かに動いてゆく汽車の窓から、あかずあたりの風光を貪るやうに眺め入つてゐた。

登りになるので車はゆるやかに動きつゞける。村を、森を、野を車窓に近々と見て、まるで歩るいて旅をしてゐるやうな氣持にさへなるのであつた。野には紫色のあざみの花と、薄紅の芥子の花が、いくらでも咲き亂れてゐた。あたりが急に暗くなつたと思ふと、車は深い森の下影をわけてゆく。森はまた林につゞく。杏と林檎の林である。丁度收穫時であると見えて、木の下には美くしい紅い模樣の寬衣をきた娘達が、白い大きな籠をもつて立つてゐる。籠の中には黃金色をしたつや〳〵しい杏の實がこぼれるほどに盛り上つてゐる。向ふの林の小徑から白髭の老農夫が小さい驢馬にのつて、笑ひながら娘達の方へ何か呼びかけてゐるのがチラと車窓

一瞬の繪を見せてすぎて行く。

なだらかな一面の草原が續く、草原がつきて白樺に似たすつきりした林が現はれると、その下影には野茨の花が白くいくらでも咲き續いてゐた。大きな素燒のかめをもつた娘達が、驢馬と一所に林の小徑を長閑さうに歩るいてゐる。それは舊約の昔の繪の再現としか思はれない。人も自然も平和そのものである。私は初秋に似たさはやかな空氣の中に、幾千年のユダヤの昔のまぼろしを白晝に描いて、移りゆく村と人と森と野とを見送つてゐた。匆忙の旅に、久しく遠ざかつてゐた形而上の世界を想ふ心がしみ〴〵と湧き上つてきたのを感じた。

たとへばそれは晴れわたつた夏の空に、一點の黑雲が現はれたと氣がつくと、見るまに空一面を雨ぐもりにして、一時の前とはまるで違つた世界にしてしまふやうに、人間の氣持は時にふとしたことから宗教的な思索だけに囚はれてしまふことがある。私は初秋に似た明澄なアンチレバノンの高原を眺めながら、ちやうどそれを感じたのであつた。唯物的な旅の中道にして心の世界に目を轉ずると、私は急に一切の無常觀や、物欲に踴る世界の果敢なさが、反動的に頭の中一ぱいにひろがつて來た。

混沌たる今日の世界相は私の頭の中から拭ひ去るやうに消えうせた。政治も經濟も、社會不安も戰爭も、貧富の爭も、毀譽褒貶も何もかも遠くの方へ消えて、人間の無常相と生に流轉の

限りなき姿だけが淋しく心の中を占めて行つた。車窓をよぎる廣野の向ふには青く澄んだ空があつた。私はぼんやりとその青空の奥遠く眺め入りながら廣大無邊な宇宙の神祕を想つた。地球に一番近いと云はれてゐる恒星、アルファー、ケンタウリですら、その光が地球に屆くまでは三百年からかゝるのだといふ、われ〳〵の想像を絶する茫莫たる宇宙の姿が思ひ起された。此地球ですらが、星雲說の遠き起源などは餘りに漠として一向現實感が無いが、嘗て大英博物館で原始時代に地上が大きな葦で被はれてゐた頃に、生物界の王者として君臨してゐたのだといふ人間程もある大きな蛙のやうな動物の骨格を見た時、襟元が寒くなるやうな氣のしたことなどを想ひ出した。そんなことをつぎ〳〵に考へてゐると私は急に淋しい氣持になつてきた。

遙々とアレキサンダーがこゝまで攻め上つて來た時に、大軍が通つたのだといふ山峽がアレキサンダー・ゲートと呼ばれて車窓の右手に見える。折からの夕照が深い谷と、その上に生え茂る森の上に火のやうに燃えてゐた。治亂興亡の跡、茫として夢の如し。私はその夜の寢臺でゴト〳〵とひゞく車輪の音をきゝながら、晩くまで寢もやらずに、人類流轉のあとゝ、果てしなき心の行衞を追つてゐた。

三日目の夕方汽車はハイドラパサに近く奔つてゐた。今までは隨分永い時間奔つてやつと停車場についたものが、首都に近づくに隨つて、とまり方が頻繁になると共に、これまでは純朴

な田舎者ばかり見てゐたのが、都會人の風俗にかはり、到る所に兵士の姿が多くなつた。兵は皆銃を手にして停車場の出入口やプラットホームに立つてゐた。私達が窓から首を出すと、大きなピストルのサックをわざと目につくやうに皮帶の前に吊した憲兵らしい男が、さもうさん臭さうに鷲のやうに鋭い目を光らせてじつとにらめつけるのであつた。それは決して愉快な感じを與へるものではなかつた。私達は口にこそ出さないが、心では油斷なく身構える氣持にならずには居られなかつた。

停車場を離れると、しかし景色はいかにも美くしかつた。折からの夕暮に汽車は海岸線を奔つて蒼茫と煙る靜かな入江に山の影が薄墨色に落ちて、赤い帆をはつた船が、搖ら〳〵と長閑さうに浮いてゐる。夕風が岸邊の草原を這つて、そのまゝに流れるさきは、湖のやうに清らかな海面にチラ〳〵と縮緬に似たさゞ波を立てゝ遠くまで光の可憐なたわむれを見せてゐる。本當に靜かな海邊の夕暮である。

だがその靜かな風光に見とれてゐると、夕闇を背負つた小高い丘の上に、銃をもつた兵が、銅像のやうにつゝ立つて奔り去る汽車を見下ろしてゐる姿が目に入る。人間の世界はどこまでも油斷のならぬ抗爭の世界なのだ。

默つて私と並んで腰かけながら、さつきから、じつと窓越しに外を眺めてゐたロンドンのク

ツク社のL君が、

「自然は平和だ。しかし人間はさうではない」

とまるで詩の一節でも口づさむやうな調子でひとり言のやうに言つた。

こんな美くしい風光を見ると誰れも同じやうに感傷的になると見える。私は思はず同感の微笑をもらして、L君の云つたことを、もう一度口の中でくり返した。本當に自然は平和だ。しかし人間はさうではない。

I

――視よ國々の中のおはりの者、荒野となり、燥ける地となり、沙漠とならん。エホバの怒りのため、これに住む者なくして悉く荒地となるべし。バビロンを過る者は皆その禍に驚き且つ嗤はん。

……耶利米亞記

バズラからバクダツドまでの荒凉たる一晝夜の汽車旅行の途中で、一汽車だけ遲らせてバビロンの廢墟を訪れた日の記憶は、いつまでも忘れ難いものであつた。荒廢といふ感じをこれ程

までに深刻に味はつたことは未だ嘗てなかつたからである。

右も左もたゞ一面の灰白色の荒野、小山はあつても木一つない荒けづりの死の丘、全く何もかも、からび切つた水氣のないすさまじい風景。しかも暑さは堪えられない程熱風に乘つてあらゆるすきまから襲つてくる。さうした苦難の汽車旅行を續けて午後三時の日盛りに私達はヒラといふ驛に下りた。驛と云へば聞えはいゝが、プラットホーム一つあるわけではない。沙漠の眞只中を二筋貫いてゐる鐵路の上に汽車がたゞ止るだけである。向ふに小さな小屋が立つてゐるのが停車場なのであるが、さくも何もないのでどこまでが構内か構外か見當もつかない。列車から砂地の上に乘降りると、カツと灼けるやうな太陽が全身を暑い翼でおゝひつくしてしまふ。とてもぢつと立つてはゐられない。私達は大急ぎで驛のそばの立木の影にかけよつた。

用意してあつた自動車に乘つてバビロンの舊蹟に向ふ。

停車場を出てからの道は荒凉落莫たる埃だらけの沙漠以外の何ものでもない。見るかぎりは赤つぽい平野と、デコボコに起伏する木の影のない丘ばかり、たまさか見出される柳の木や棗椰子の木立は埃だらけの暑くるしい色をしてゐる。キヤメル・ソーンと呼ばれる刺だらけの灌木も道の兩側に生えてはゐるが、埃をかぶつて靑といふよりも灰黑色の暑くるしい感じが、見るものをしてイラ〳〵させるばかりである。

二十分のドライブの後、私はバビロンの舊蹟についた。案内を職業とするアラビヤ人の群がもうそこに固り合つて待つてゐた。

自動車を降りた私は思はず呆然としてそこに佇んだ。どこにアノ當時、世界文化の粹をあつめた、豪華なるバビロンの舊蹟があるのだ。四顧すれど、見る限りは木一本ない裸の土山が眼前に起伏して居るばかりである。いくら廢墟ではあると云つてもこれは餘りにひどい舊蹟である。徒らなる土の山と岩石の載積、これがそも〳〵バビロンなのであるか、世界に誇つた大都市の跡なのであるか。

案内者は土塊の山を登つて行く。私達はゴロ〳〵した歩るきにくい小石の徑をあとからついて行つた。

小高い頂上まで登ると發掘された土中の燒跡のやうな景色が目の前に展開されてきた。案内者は今來た道の方をふりむいて杖をあげた。

「アレがアレキサンダー大帝の住んだ宮殿の跡です」

指すあたりには平凡な灰白色の丘が連らなつてゐる。そのうしろは平沙百里、遙かの向ふにユーフラテスの流れが夢のやうに一筋白く霞んでゐる。

「こちらがハムムラビ王の舊蹟です」

と案内者がまた指す邊りも、目に入るのは木一つ生えてゐない古墳に似たる土の丘である。治亂興亡は一夢だとは云つても、世にこれ程も茫莫とした夢があるのであらうか。そこには土に還元したる一切の死の姿以外には何ものをも見出すことは出來ない。

アレキサンダー大帝の名も古く、ましてやハムムラビ王の名は遠い歴史の頁に殘る古き名であるが、バビロンそのものは更に〳〵遠い人類の文化への大いなる足跡として殘された都であつた。文獻に徵すればバビロンの創始は紀元前四千年に遡るといふ。正に今からは六千年の遠き〳〵昔のことである。しかしバビロンが全世界の文化の中心としての華やかな黄金時代を最初に現出したのは紀元前二千年ハムムラビ王の時代に他ならなかつた。それまでのバビロンの歴史はあはたゞしい興亡の幾變化を見せて、アツカド王サルゴン一世の勇名をも史上に止めてゐる。續いて北方の山地から襲つて來た慓悍きはまりなきギユデア民族の侵入から、ラルサ、イシン等の諸地方の勇將の攻守まで、あはたゞしい人類爭鬪の悲喜劇が、此都を中心に繰り返された幾星霜の後に、英傑ハムムラビによつて、こゝは言葉通りに世界文化の中心となつたのであつた。

ハムムラビ王の編んだ法典が世界最古の成文法として今なほ史上の特異となつておることは今更らしく書くまでもないことであらう。王はその他に、大きな寺院を建てた、凶作に備へる

めに小麥の大倉庫も建設した。縱横に運河を掘つて水利の業をも營んだ。天下の學究をこゝに集めて智識の源泉ともした。當時のバビロンは正に言葉通りに全世界の精神文化と物質文明との中心であつたに違ひないのである。

これ程に華やかにも輝かしいハムムラビ王の事跡が今何の形を殘してゐるのか。案内者の指す杖の先きには、赤土の禿山が無限の沈默を守つて横はつてゐるばかりである。沙漠を渡る熱い風が地の果から吹き寄せてくると、丘の所々に生えた貧しい灌木が、遠い東洋の果から來た旅人に何を訴へる心か一齊に刺ばかりの莖を搖りうごかしてゐる。

「アレキサンダー大帝の舊蹟も、ハムムラビ王の舊蹟も、どらんの通りに殆んど殘つてゐませんが、ネブカトネザーの建設したバビロンは立派に殘されてゐます。これから御案内する發掘のあとは皆その時代のもので、つまりバビロンの舊蹟はネブカトネザーのバビロンであるわけなのです」

と案内の男はきびすを返して先に立つた。凸凹の足場のわるい石山の道つゞきに、遠くまで火事場の跡に似た發掘の跡が骸骨のやうに望見されてゐた。

ハムムラビ王からネブカトネザー二世までには千五百年の永い歳月が横はつてゐる。その間にもアツシリアの興亡を中心として史上の悲喜劇は目まぐるしく展開しつゞけた。バビロンは

滅亡して荒廢に歸した。アッシリヤ亡びて後、メソポタミアの南部に僅かに殘されたバビロニアと、メディヤ、エジプト、リディヤ等の國々が群立割據して舊アッシリア領内に對立してゐたが遂に北方の雄、ネブカトネザー現はれてバビロンを占有し續いて英傑ネブカトネザー二世國内統一の覇業を完成するに及んで、こゝに一度びは灰燼に歸したバビロンの再建が斷行されて、舊に倍した新バビロニア帝國の首都である豪華極まりなきバビロンの出現を見るにいたつたのである。今私達の目前に横はる廢墟の都こそ二千五百年の昔に再建せられたるバビロンの跡なのである。

新らしく再現したバビロンは古文献によつても實際すばらしいものであつたらしい。大土木事業は興された。廣壯な城壁をめぐらして華やかな市街が營まれた。宮殿は美の限りをつくし神殿は壯嚴そのものであつた、「レバノンの山より杉の巨木を仆して運び、光り輝く金箔を以て柱に塗り、尊き寶石を惜しげもなく象眼した。ブロンズの巨牛の像には大理石を以て裝つた。」と書かれてゐる神殿のいかに贅をつくしたものであつたかは想像に餘りがある。後年ギリシヤの史家ヘロドータスがこゝに旅をしてすでに崩された礎石を見てさへ驚嘆したと云はれておるが、それは正にネブカトネザー二世が自ら揚言して「われより以前のいかなる王も成しとげざりしことをわれは成し遂げた。山にも似たる城壁は灰と煉瓦とをもつて正に山の如くに動

がざるものとした。その礎は地下の冥府までも深く堀り下げて築いた。その頂きは山よりも高く聳えさせた」と云つてゐたことをそのまゝに裏書きしておるものと見て差支へがないやうである。

天にまで達せんとして築かれたバベルの塔。ネブカトネザーがその寵妃を慰めるために故郷の花を植えたと云はれる豪奢なるハンギング、ガーデン、それらは何れも古い文獻によつて私達に限りなき王者の權力を偲ばせはするが、その榮華もやがてまた榮枯無常の流轉の浪に漂つて、新バビロニアもやがてまた亡び新たに興つたイラン民族の王、ペルシヤのキュロスの下に雌伏せざるを得なくなつた。つゞいて疾風に似たるアレキサンダーが歐亞の天地を蹴散らしてバビロンは一片の花よりももろく散り失せてしまつたのである。

案内者は一々説明をしながら廢墟の山に上り、山を下りて、そこに殘された巨大な礎石について尤らしく物語るが、私達にとつてはそれは恰も關東の大震災の直後に、燒け落ちた茫莫たる骸骨のやうな街の姿を見て、在りし日をどう想ひ起しやうもなかつた時と同じ經驗をとり返すにすぎなかつた。歐洲大戰の初まるまでこゝの發堀はドイツの手によつて行はれ、貴重なる材料はすべて獨逸に運び去られてしまつてゐる。今でも伯林の獨逸博物館のバビロン室に行けば、そこには在りし日のバビロンの榮華は夢のやうに私達の頭に浮び上がつてくる。もし人あ

つてバビロンの本當の遺跡を訪ねやうとならば恐らくは伯林に行つた方が早道であらう。沙漠の中のまことのバビロンは、死の殘骸以外には何ものも殘されてはゐない。壘々たる石屑の載積、たゞそれだけである。木も草もろくに生えてはゐない。

私達は默々として大した感興もなしに案内者の饒舌をきゝ流しながら、足許のわるい石ころ道を歩いて行つた。バベルの塔のあとと云はれる所にも、徒らに礎石のあとを思はせる大きな穴に濁つた水がたまつてゐるだけである。

「これが有名なイシュタール門です」

と案内者が崖の上に立つて指す目の下には、これだけは完全にバビロンの在りし日の面影を止めてゐる豪壯な城壁が、地下數丈にわたつて堀り返されたまゝ嚴然として屹立してゐる。

この門は高さ數丈、王の宮殿に通ずる門の一つで二重の構造になつており高く〳〵築き上げたる城壁には施釉煉瓦で見事な獅子や麒麟などの姿が描かれてゐる。二千五百年の風雨も黄、碧、白の色彩をいさゝかもあせさせず、アツシリヤ、バビロニアの藝術の粹をそのまゝに浮彫して、見る者を驚異の世界に引きこんで行く。

遙かの小山の向ふに、これも有名な「バビロンのライオン」が立つてゐる。すばらしい巨像はたゞ眞黑な荒彫で、裸體の男が大きな獅子の足の下に踏みつけられてゐる。捕虜の刑罰を現

はしたもので神聖な神殿への入口に据えられてゐたものだといふから、恐らくはその丘を越へて遙か向ふにすばらしい華麗な神殿が聳えてゞもゐたことであらう。

一通り廢墟の跡を根よく歩るき廻つてとある丘の上に立つ。今まで見て來たあとを振り返つて見ても遂に骸骨だけの死の都といふ印象以外には何も殘らない。崩れ果てた石くればかりの荒茫たる地上に沙漠の暑い日がギラ〳〵と照り輝いてゐるばかりである。大方昔はこゝにも美女が群れてゐたのであらうと思はれる崩れた石垣のそばの草叢から、るり色の美くしいブルー・バードが一羽バタ〳〵と飛び立つて、遙か向ふの空にとんで行つた。鳥影を追へば遠き沙漠の地平線のあたり、椰子の林の帶のやうに永くのびてゐる果てを駱駝にのつたアラブ人が二三人豆のやうに小さく動いて行くのが見える。

興亡六千年、顧みて眞に一夢の如しである。

待たせて置いた自動車に乘つてバビロンを去る。暑い〳〵日にむされながら、もとの停車場まで歸つてくると次の汽車がてふど私達を待つてゞもゐるやうに停つてゐた。

汽車に乘らうとして構内に入ると地上に三人の老人が坐つてゐるのが見えた。彼等は何れも靴をぬぎ、上衣を脱いで地に敷き、その上にひざまづいて、やゝにかげり出した日の方に向つて立上つてはひざまづいて三拜し、又立上つては三拜し熱心に祈禱をさゝげてゐた。メツカへ

の夕の禮拜であるさうである。私達はやゝ暫く汽車に乘るのも忘れて、その狂人じみた老人達の宗教の儀禮に見とれてゐた。

その夜、私は百度以上の暑いバクダツドの宿で寢られぬまゝに轉々して、人世の流轉のさまをしきりに想つた。

榮枯盛衰の無常觀はバビロンを見て感ずるまでもなく、旅のいたる所で見もし聞きもし感じもした。しかし私がバビロンの廢墟を訪れて最も深く傷心の糧となつたものは、無常なのは人の世のみではなく、大自然もまた同じ運命の浪に棹してゐるのだとしみ〴〵感じさせられたことであつた。人はかはり、世は移る。しかし自然のみは悠久に同じ姿を止めて變らないとはいたる所で私共の胸にわいた感想であつた。だが此感想も時の流れの偉大さを遠くまで見透さない短見に他ならぬことをバビロンは敎へてくれた。

六千年の昔、エヂプトとバビロンとは世界文化の二つの中心地であつた。人才こゝに集まり藝術の花はこゝに美くしく咲き、智識の實はゆたかにこゝにみのつた。世界のいかなる果てにもこゝ程立派な人類の住む所はなかつたのである。北方の山地から流れて來た人達はチグリス、ユーフラテスの二つの大河が洋々と流れてゐる沃野を見出して、こゝに幾十幾百度の血を流す平野の爭奪戰ともなり、遂にこれを戰ひとつたものが、こゝに理想の都を築き上げたのに相違

ないのである。土地肥えて美くしければこそこゝに都を定めたのであらう。しかるに今見るバビロンは骨ばかりにやせ果てた血も肉もない沙漠の死の平野である。木も草もろくにない見る限りのカサ〳〵の赤土の上に暑い熱帶の日が輝いてゐる土地である。

假りに今日のバビロンのある地方を見て、誰れがこゝに大都を建設しやうといふ考へをもつものがあるであらうか。もし左樣な野望を抱くものあらば、それは狂人と云はれてもいたし方はあるまい「見よ國々の中のおはりの者、荒野となり、燥ける地となり、沙漠とならん」と耶利米亞記には記してある。して見れば勿論當時は荒野でもなく、燥ける地でもなく、沙漠でもなかつたに相違ないのである。豫言があざやかに適中して住む人もなき荒廢の地となつた今日から見れば沃野としてのバビロンを想像のしやうもないが、嘗てはそこに美くしく花咲き綠の樹々は茂つて地上の樂土であつたことは明らかである。それが春秋六千年。宇宙の永きから見れば一彈指の間にすぎない星霜であるかも知れぬが、人のみでなく自然そのものまでが樂土から地獄へと轉落の跡を見せておるのである。

人かはり星移れど、自然のみは悠久だと私達はよく口にする。しかしそれも亦大きな誤りであるのだ。人逝き國亡び、榮枯盛衰は夢と化し勝つものも負くるものも、同じやうな虛無の世界と忘却の谷へ一樣に蹴落してしまふやうに、自然の姿もまた無常の法則からは遂に免れるこ

とは出來ないのである。

六千年、口で云へば僅かに六千年であるが、人類の歴史はその間に目まぐるしい變化を重ねる。自然もまた同じ變化の浪に漂つて日を重ね、月を閲して行くのだとすれば、これから先きの六千年後には、嘗て在りし六千年と同じやうな變化が地上に起らぬと誰れが豫言することが出來やう。今日の世界文化の華と咲く、倫敦が、巴里が、紐育が、メソポタミアの沙漠の廢都バビロンと同じ姿に化する日が來ないとは誰れが豫言することが出來やうぞ。こう考へた時、私はどう慰められやうもない果敢ない淋しい氣持がしてきた。

Ⅲ

誰れの著書であつたか濫讀するのではつきり覺えてゐないが、何でも世界的生産過剰を論じた經濟書の冒頭に、火星から地球を遠望して火星人が述懐してゐる比喩の書いてあつたのを記憶してゐる。地球の上の人間はあらゆる智慧を盡して、いたる所を耕し、地は堀れるだけ堀つてあらゆるものを取る。さうしてかやうな天然のものを極度に利用して、驚くべき多種多樣のものを生産する。建築も立派なら交通も發達し、驚き入つたる文化である。然るに何としたことかこれ程物價が豐富で食糧が充實してゐるのに、どこを眺めて見ても到る所に職業が無くて

困つてゐる者が充滿し、食ふことが出來ないで苦るしみ惱んで居るものがうよ〳〵してゐる。どう考へてもわからないのは地球の現狀だと。

「現在の人類の慘めさは一方にます〳〵壓力を加へてゆく調整の增大に、一向適合して行かぬ人類の無智なる心の爲めである。昔はたとへ幼稚なものであつても、文化も、政治も、法律も、經濟も、道德も、宗教も、人類を立派に支持して來たのに、今ではこれらは不一致と危險を增させるだけのものになつて來てゐる。しかも吾等はどうしたら是等の一切を根本的に清算して、新らしい組織を生み出すかについて、皆目、見當もつかずにゐるのである」

とウエルズも最近の論文の中で、そんな意味のことを書いてゐたと記憶する。

物餘りあつて人餓ゆ。この矛盾から枝が出、根がのびて、今ではどうにも刈りつくせぬやうな經濟界のあらゆる矛盾した動きを包む、巨大な大樹となつてしまつてゐるのが現狀の姿であらう。恐らく一九二九年に端を發して一路轉落の下り阪をころげ續けてゐる世界經濟の行つまつた慘めさと、ロンドン經濟會議決裂後の國家主義に準據した各國經濟政策の目まぐるしい變化とは、後世の經濟史家から見たら驚嘆すべき劃期的の時代として描き出だされるに違ひない。吾々は現にこの時代に栖んで生きておるから感じ方がいつか慢性的に鈍くなつて來てしまつてはおるが、遠くはなれてこの時代を見たら實際驚異すべき不安と混迷期の眞ん中に漂つて

ゐる慘めな姿に見えることであらう。

私は今更、近年の矛盾した經濟相なんかを改めてこゝに書き綴らうとは思はない。そこにはどの問題を取上げて見ても、過去の經驗ではこれを律することの出來ない、否、過去の理論などは鮮やかにふみにじられて反對の結果を招來しておるやうな、矛盾だらけの動きが、いたる所に横はつて居るからである。

しかも最も不幸なことはこの不安定と混迷とがいつまでたつても解決のつかぬ謎として殘されつゞけてゐることである。ウエルズの云ふやうに一切を根本的に清算して、新らしい組織が生み出せるならそれが一番いゝことには違ひない。しかし人類の生活に根をはつてゐる變化を恐れる感情は、なか〳〵一切の清算を斷行させる勇氣はない。どうにもならないとは思つても今までの生活と丸で違つたものを取上げる氣にはならないのである。現狀打壞といふ怖ろしい事實の前には誰れもかれも本能的に必死の防禦線をはつてゐるのである。

現狀と大した變化なしに何とかしてこの行つまりを切拔けやうといふ注文が最初から無理なのである。その無理を承知の上で、すてゝも置けぬからと人間的にいろ〳〵な政策を考へ出しては實行する。一時的の注射で苦痛を逃れるだけで、根本の病源はのぞけない。病源が去らぬから注射は頻煩に行はれる。やがて應急策が無效になるまで注射中毒が深まつて行くだけであ

る。NRAの最後もその一例であらう。列國お互に輸入の制限ばかりやつて、それで世界の生産が繁榮になる筈がないのを、無理押しに押して行く大勢もまたその一例であらう。今日の世界はどこを見ても、かうした矛盾撞着ばかりが充ち滿ちてゐるのだ。

それも、いろ〳〵の人爲策を實行して效顯あらたかでゝもあれば別であるが、それもない。南洋から中東、歐洲と旅をして廻つて私の最も深刻に印象づけられたものゝ一つは、文明國に乏食多くして未開國に寧ろ少いことであつた。ウキーンやプラーグの華やかな大通りを歩るき廻つて、大きな建物の一角などに、まだ若い男が默々と立つくして、往來の人に一々合掌しつゝ施を乞ふてゐる姿などを見ると、肌寒い氣が幾度かした。バクダツドだのダマスカスだのといふ沙漠の中の町では、回教の寺院などに行けば醜い乞食の群が居たが往來ではかへつて少かつた。

伯林や倫敦の街を歩るいて婦人の服裝が昔にくらべて著しく粗惡なものになつて來てゐることは、行きづりの私達の目にもついた。金のかゝつた豪奢なものはまるで見られなくなつて、人絹でごまかしたやうなものばかりがいたる所で目についた。明らかにそこには國民生活の低下が反映してゐるのである。シリアでもイラクでも土民の服裝の變化は私達の目をそばだゝしめるに足るものがあつた。しかしその變化は歐洲の華やかな都會で感じたものとは丸で別趣な

ものであつた。アラビヤ人の住むかうした地方では、男は白の寛衣に、釜敷きのやうな妙なものを頭にのせ、女は頭から黑のかつぎを纏つて目ばかり外に出してゐる。さうした人達ばかりが群れてゐるものと心得てゐた。大體はその通りであつた。しかし町で見る二十代位のインテリ層の男女はもう明らかに古い型から脱け出やうとしてゐた。男は腰から下の袴こそ舊アラブの風俗そのまゝであるが上衣は西洋流の背廣を着てゐるものが多い。服地は木綿の粗末なものではあるがとにかく形はついてゐた。私はその妙なスカートをつけて洋服をきたやうな若い男達を見て、歐洲の大戰後、ロンドンの街に一時横行した婦人巡査を見てゐるやうな氣がした。若い女はまた男とは反對に、さすがに回教の舊い宗教上の儀禮はすてかねるものと見えて、目ばかり出した黑いかつぎは頭から被つておるものゝ、腰から下は全く西洋流の氣の利いたスカートをつけ、レースの下着などをチラつかせながら、人絹の靴下に伊達を競つて、ハイヒールの靴をはいて氣取つて歩るいてゐる。まだ完全に舊い殼から脱け切らぬ中途半端なものであるとは云つてもこゝには明らかに歐洲諸都に於る退化した服裝とは違つて、向上しつゝある生活の様式が現はれてゐるのである。

生活の內容そのものから云つても文明國と未開國の間にはかなりの逆現象が見られるやうである。歐洲のいたる所で、私は十二三年前の昔より生活內容の貧しくなつた實證を散々に見せ

つけられた。これに反して南洋でも中東でも土人の生活そのものは向上して來てゐる實證をこれまた澤山に見せつけられた。裸足のものがゴム靴をはき、半裸の女が人絹の安い上衣をきるやうにもなつた。ジヤバあたりでは昔とは違つて婦人が皆ズロースをするやうになつたと云つて驚いてゐた人もある。

云ふまでもなく所謂世界國恐慌の中には文明國も未開國も皆一様にまきこまれて苦しみ惱んでゐるのは事實である。殊に農產物を主とする未開國が近年の農產價格の暴落に會つて疲弊しておることは申すまでもない。それにもかゝはらず生活のレベルから見れば文明國が著しく低下しておるのに、未開國の方は上つて來てゐる。これには理由もいろ〳〵つけられるであらう。しかし私は決してわるい現象ではないと思ふ。

持てるものは更に與へられ、持たざるものはすでに持てるものをさへ奪はるといふのは人類全體の經濟活動から見て決してほめたことではない。未開國の人達に物資が需要されてそれだけ市場が擴大されてゆけば結構なことに相違ないのに、これをしも防壓して來るだけ世界的の物資流通の道を狹めることばかりに汲々としてゐる。一方には富の再分配といふやうな理想論が國內對策として論議され乍ら、國際間にはいよ〳〵これと逆行する方策が奬勵されてゆく。南洋でも中東でもアフリカでも中南米でも、民衆は安くて良い日本品に感謝し、日本品進出の

おかげで安い生活と向上した生活が出來るのを樂しんでゐる。しかるにその背後にある本國やら、委任統治權をもつ國やら、これらの弱國を力で抑へてゐる國やらが、民衆の意志などは踏みにぢつて自國の利益本位で、日本との通商を抑へることばかりを强制してゐる。

かうしてどこもかしこも通商の路をお互に無理押しにせまくし合つて、それでどうして「世界經濟の回復」とやらが成し遂げられる時が來ると考へてゐるのだ。山に入つて魚を求め、海中で鹿狩をするよりも一層無理な矛盾ではなからうか。

サムソン、ウルサスの强力を以てしても、僅か二三貫目の石すら長い時間支へてゐることは出來ない筈である。人間の無理な力は遂に目に見えない地球の引力には抗すべくもないからである。人間が自然を征服するのは痛快なことに見える。しかしいくら征服したつもりでゐても默々として進んで行く自然の理法には結局支配されて行くのではないのか。この天の法則を見透して、この天に則つて行く心掛けを忘れ果てゝしまつた人間ほど哀れなものは無いのではなからうか。

世界文化の中心地をいつか人の住まぬ沙漠に化してしまふ時の力、自然の法則、私はもう一度、遠い大きな力を考へ直す必要を感じ出してきた。

Ⅳ

暑い日盛りの砂を踏んでギザのピラミツトや、スフインクスを見て廻つた私達は、遊覽客對手の駱駝が群をなして門前に休んでゐるミネ・ホテルに入つて、青い木と草花の美くしく取合はされてゐる前庭で冷めたいものを飲んで息を休めた。日はいつか盛りをすぎて眼前に山のやうに立つてゐる大きなピラミツトの頂きに掃いたやうな白い薄雲が二筋三筋流れてゐる。

六千年の帝王の夢は今では遊覽客對手のカイロ人の小さき資源として殘されてゐるにすぎない。こゝに來て古代埃及を想はふとする者は案内者のチップねだりに忽ちに靜思を奪はれてしまふに違ひない。所詮こゝは古き死骸の見世物場である。

疲れてはゐるが今夜中にスエズまで出て船に乘らなければならない。私達は待たせて置いた自動車にのつて、スエズまでの三時間餘りの道を眞直ぐに奔らせることにした。

埃と馬糞の匂ひに滿ちてゐるやうなカサ〳〵の感じのするカイロの街も、さすがに夕闇が迫つてくれば、街路樹の葉づれに涼風が渡つて、公園にはさつぱりした白いものを着た英人の小供達が、夕涼を樂しみながら悅しげに馳け廻つてゐるのが見える。

街を出はづれ、村落を通りこして沙漠地帶に車をのり入れた時には、もうすつかり日は落ち

て蒼白い夜が見ゆる限りの廣茫たる廣野を領してゐた。沙漠のドライブ程單純なものはない。朝からの旅のつかれに私はいつかうと〳〵と居眠りをしながら平凡な道を搖られて行つた。

どの位時間が經つたのだか知らない。

「良い月だなあ」

とフと誰れかのいふ聲に夢心地から醒めた私は窓越しに外を眺めて見た。今はもう一面に夜の世界となつて、人一人居らず、木一木生えてゐない廣漠たる沙漠の上に、大きな十五夜の滿月がぽつかりと浮び上つてゐた。

それはいかにも涼しい月であつた。神祕な感のする月であつた。四邊の風光が沙漠の夜といふ特殊な背景を持つておつた爲めであるかも知れぬが、私はこれまで嘗て味はつたことのない不思議にも深い、幽玄な想に囚はれた。

頭が妙にはつきりしてきた。奔つてゆく車の窓から、ます〳〵冴ゑてゆく丸く大きな月をじつと見つめてゐると、次から〳〵へといつか私は冥想の人となつてゐた。わが身の上を想ひ、人の身の上を思つた。國家、社會の移りかはりを想つた。古今東西の人類の悲喜劇を思ひ、運命の浪に漂ふ興亡盛衰の跡を想つた。

「窮極の姿を見つめてゐる者には一切の不安はない筈だ」と私の考へは最後の所へ落付いて行

つた。私は自ら省みて、つまらないことに憤つてみたり、悲しんでみたり、人を恨んだりしてゐる日常生活が自分で耻かしくなつて來た。人知らずして慍らずと云つた孔子の心持などは結局はすべての窮極を見透して大盤石のやうに安んずる心の叫びであるに違ひない。

百年の遠きを想はざるまでも、少くも十年十五年の先きを見透して、正しい心のさし示すがまゝに僞らず生きることを誰れもが考へるならば、恐らくは今日の世界相は一變するであらう。經濟の動きも根本的に變つてくるであらう。さうして少くも、一時は苦るしくとも、今のやうに前途がどうなるやらわからぬといふ混沌たる不安の姿から脫して、前途は遠くとも一點の光が見出されるであらう。

光の見えない生活くらひ淋しくはかないものはない。今はどこにも光の見えない生活ばかりが世に滿ちてゐるやうである。心の底を叩けば誰れも前途に光を見失つた寂莫感を抱いてゐる人ばかりであるやうな世の姿を見てゐるのは堪えられないことである。近くばかりを見てゐたら光は見えない。遠く目を放てば一點の灯は必ず望みうる筈ではないのか。すべての窮極の姿を見つめれる所に光がある。——

黑條々たる沙漠の上に冷めたくかゝつてゐる一輪の明月は、私の思索を遠い〳〵所まで運れて行つた。私は眠氣などは全く去つてはつきりした心で、いつまでも〳〵月の面を見つめて

窮極を想ふ

ゐた。

本文畢

後記

昭和九年の晩春から夏の終りにかけて、私は大毎・東日世界新市場視察團の一行と共に、歐亞の各地を巡歴した。上海を振出しに、比律賓、セレベス、ジヤバ、インドを經て、中東のイラク、シリアから古耳古に入り、バルカンの國々を訪問して歐洲に出た。國にして二十數ケ國、時は盛夏の交であり、熱帶地が大部分であつたために、旅としては實に辛らい旅であつた。日本人の一人もゐない瘴癘の巣である酷熱地帶を遍歴しておる時は、肉體的にも精神的にも疲れ果てた。しかし旅はつらい程回顧すれば想ひ出が深い。南船北馬、これまで隨分各國各地の旅に馴れてきた私も、今度の旅ほどいろ〳〵の思ひ出に富んでゐるものはない。

私はいはゆるありふれた形式の海外旅行記を好まない。そこで今度のこの思ひ出の多い辛苦を重ねた旅の記念として、それ〴〵獨立した短篇の印象記をいくつか書いて、全篇を通じて旅の全貌を纒めることを試みてみた。このうち最初の四篇は大阪毎日新聞紙上に連載したものであるが、他は悉く新らしく書下ろしたもののみである。

私の旅の目的は新市場中心の經濟事情の研究調査にあつた。しかしこの印象記を書くに際しては、さうした專門的のことは出來るだけ觸れないことにした。新市場貿易論は別に稿を起して、近く專門的の研究として出版する豫定になつてゐる。從つて、これはどこまでも旅の趣味的印象記である。私は自分が印象の最も深かつたものを中心にして、斷片的に描いた各地各様

後記

の點描を通じて、全般に亘る旅の色と匂ひとを、幾分でも讀む人に與へられゝば願ひはすでに足るのである。

猶、私のために本書の裝訂をしてくれた、舊き友人近藤浩一路畫伯。並に近來甚だ筆不性になつてゐる私を鞭韃して、是非旅行記を纏め上げろと勵ましてくれた、先輩並びに友人諸兄に心からの感謝の意を表する。ともかくも永い間かゝつてこつ〳〵と此一冊を書き上げ得たのは全く知己の方々の好意のおかげであることを、しみ〴〵と感ずるからである。

昭和十年秋

兵庫芦屋にて

下田將美

歐亞點描

昭和十年九月六日印刷	
昭和十年十月十二日發行	
著者	下田將美
發行者	茅原要三
印刷所	萩原印刷所 東京市牛込區山吹町一九八
發行所	一元社 東京市本郷區弓町一ノ二五
版權所有	定價二圓八十錢

688
21

4-16

14年 8月 26日 4—29

調査完済

一元社版